BUNRON
Zeitschrift für
literaturwissenschaftliche Japanforschung
Heft 8 (2021)

ヴァイマール期ハイデルベルク大学への日本からの留学状況とその歴史的背景

久野 譲太郎 （京都）

Abstract

In this paper the situation of Japanese students studying at Heidelberg University in the first half of the twentieth century will be discussed. Heidelberg University had a major impact on the scholarly evolution of Japan, especially from the Taishō period (1912-1926) onwards. It is therefore important to get an idea of the modes and concrete circumstances of academic exchange with this university for understanding the process of formation of scholarship in modern Japan. This preliminary investigation seeks to introduce the facts, that is the concrete numbers, names and the major of regularly enrolled students from Japan at the given time, and statistically discloses the scale of study abroad and trends of its evolution. By comparing these numbers with those of other universities and those of Heidelberg University during the period of the Second Empire, the rapid increase of the number of Japanese students at Heidelberg University during the Weimar Republic becomes clear and a change in the characteristics of study abroad can be observed. An explanation for these circumstances is provided through a closer look at the historical background in both countries. Four primary factors can be detected here: the spread of higher education in Japan, the expansion of the inflation in post First World War Germany, the reception of the play “Alt Heidelberg” by Japan's intellectual class, and the flourishing of Neo-Kantianism in the academic world. The fourth factor seems especially significant, as the “Südwestdeutsche Schule”, being based in Heidelberg, had a major influence not only on Japan's modern philosophy but also on the formation of social sciences. As a conclusion, the paper confirms the far-reaching influence and historical significance of academic exchange with Heidelberg University, especially in the field of social sciences and Neo-Kantianism, while also addressing some important issues that are left for further examination.

1 はじめに

よく知られるとおり、明治期以来、法制や軍制の整備から医療技術の導入に至るまで、近代日本の形成に対しドイツとの交流が果たした役割は非常に大きかった。それはもちろんその基礎となる学術や文化面でも例外ではなく、近代を通じ日本からの留学生たちはドイツの各大学において当時最先端と見做された様々な科学や知識を学び、自国へと持ち帰ってはその近代化と発展に寄与した[1]。

[1] 留学の定義についてはこれまでの留学史研究においても多くおこなわれているが、ここではひとまず、先進的な外国の学術や文化を学び輸入することを目的として現地の研究・教育機関に身を置く、いわゆる「直流

そして当時、そのような留学生が数多く学んだ大学のひとつに、ルプレヒト=カール大学（Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg）、通称ハイデルベルク大学があった。1386 年に創設された当大学は現ドイツ連邦共和国最古の大学として著名であるが、1868 年、ドイツの大学に学籍を登録した初めての日本人である小松済治（旧姓・馬島）（Komatsu Seiji, 1848–1893, ursprünglich: Majima）[2]が学んだのもこの大学であった。爾来多数の日本人が当大学で学び、なかでも日本では大正から昭和初期にあたる第一次世界大戦前後の時期には相当数の日本人がここハイデルベルク大学を目指し、籍を置いていたと考えられる[3]。そして周知のように、まさに日本の人文・社会科学はこの時期にこそ幕末・明治期以来の萌芽的段階を脱し、発展期を迎えている[4]。その意味では、近代日本の学知形成や文化振興に対しハイデルベルク大学との学術交流が担った役割は特に大きかったと見られるべきであろう。事実、当時期留学した留学生のなかにはその後著名な学者や知識人となって日本の学界や思想界を牽引した者も少なくない。したがってこれを逆に言うならば、近代日本の学知形成のあり方や思想的特質を内在的に問い直し、正確に描くためには、ハイデルベルク大学との学術交流の実態とその影響を精密に解明しておくことはまさに必須の課題と言わなければならない。

しかしながらこれまでの日独の文化交流史研究では、主として時期的には第二帝政期あるいは明治期の交流と影響に焦点を当てるものが圧倒的に多かったため[5]、それに比べると、近年研究が進みつつあるとはいえ、未だヴァイマール期ないし大正・昭和初期の交流実態については研究の蓄

型」留学を念頭に置くこととする。辻直人による簡潔な定義を借用すれば、「一定期間を海外の教育機関で研究ないし教育を受けてくる行為」ということになろう（辻 2019: 1。同 2010 も参照）。

[2] 江戸（東京）生。会津藩より派遣された日本人最初のドイツ留学生。1868 年にハイデルベルク大学で医学を学び、帰国後は司法省民事局長、横浜地方裁判所長等を務めた（Vgl. Araki/Schamoni 1999. 荒木 2003）。なお、小稿では、本文に登場する日本人のうち、ヴァイマール期ハイデルベルク大学への留学生以外の人物についてのみ脚注で簡潔に触れる。ヴァイマール期当大学の留学生については後掲表 2 を参照されたい。

[3] 加藤 1972: 180–195、生松 1980: 221–239、内田 1996: 54–55、山田 2005: 124–139、和田他編 2006: 41–43、シュヴェントカー（野口他訳） 2013: 81 など。

[4] 石田 1984。

[5] ここでは明治期を主題としないため当時に関する研究文献にまでは言及しないが、一部を紹介すればたとえば以下の文献がある。Rauk, Michael, Yanagisawa, Osamu (1994): *Japanese in the German language and cultural area. 1865-1914. A general survey*. Tōkyō: Tōkyō Metropolitan University. Kim, Hoi-Eun (2014): *Doctors of Empire. Medical and Cultural Encounters between Imperial Germany and Meiji Japan*. London: University of Toronto Press. Krebs, Gerhard (Hg.) (2002): *Japan und Preußen.* München: Iudicium Verlag. 堅田剛『独逸学協会と明治法制』木鐸社、1999 年、瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制-シュタイン国家学の軌跡-』ミネルヴァ書房、1999 年、荒木康彦『近代日独交渉史研究序説-最初のドイツ大学日本人学生馬島済治とカール・レーマン-』雄松堂、2003 年、森川潤『ドイツ文化の移植基盤-幕末・明治初期ドイツ・ヴィッセンシャフトの研究-』雄松堂、2005 年、同『明治期のドイツ留学生-ドイツ大学日本人学籍登録者の研究-』雄松堂、2008 年、林正子『博文館「太陽」と近代日本文明論-ドイツ思想・文化の受容と展開-』勉誠出版、2017 年、堅田智子他「ドイツに留学した日本人物理学者たち-1893 年から 1914 年までの滞在・在学状況の集団的分析-」『国立科学博物館研究報告 E 類（理工学）』2018 年など。また近年では基礎法学分野でこの方面の研究が盛んであり、堅田剛『独逸法学の受容過程-加藤弘之・穂積陳重・牧野英一-』御茶の水書房、2011 年やハンス・ペーター・マルチュケによる諸論考（Marutschke, Hans-Peter: *Rezeption und Austausch im japanischen Gesellschaftsrecht in der Meiji-Zeit*.『同志社法学』2016 年 4 月. Derselbe〔同〕: *Dissertationen japanischer Juristen an deutschen Universitäten in der Meiji-Zeit (Teil1). Beispele aus dem Bereich des Gesellschaftsrechts*.『同志社法学』2020 年 3 月. Derselbe: *Dissertationen japanischer Juristen an deutschen Universitäten in der Meiji-Zeit (Teil 2). Beispele aus dem Bereich des öffentlichen Rechts (1)*.『同志社法学』2020 年 11 月）があるほか、石部雅亮編集の新刊雑誌（石部雅亮編『法の思想と歴史』2020 年 12 月）が特集を組み、マルチュケ論考の一部日本語訳版を含め、その他以下の論考を収録している（石部雅亮「明治初期における日独学問的交流政策」、高橋直人「「独逸法学博士」と明治期における日独間の法学交流」、的場かおり「1980 年代の大学教育・大学行政とドイツ国法学 – 文部省特派留学生・末岡精一(1855–94)を中心に –」、大中有信「忘れられた裁判官の日記 (1886–1933) その再発見と概要 – 大審院長富谷鉎太郎日記のこと–」）。

積が少ない状態にある[6]。またそれに加え、明治期以来日本にとってベルリン（特にベルリン大学）こそが常に最大の留学先であったという事情も手伝い、従来は必然的に首都ベルリンとの交流を中心に両国の関係を描く傾向が強かった[7]。そのため、その他大学に関する留学や交流については、人物史研究の一環として取り上げられる事例を除けば、網羅的研究がさほどは進んでいない[8]。しかしたとえ明治期の交流が日本の近代化にとり決定的な位置を占め、またそこではベルリン大学が最も重要な留学先であったとしても、当然ながら近代日本は明治期にのみ、ましてひとりベルリンにのみ留学生を送ってきたわけではなく、その後もその他多数の大学や都市に留学生を送りそこから多くを学んできた。そしてその影響もまた、それは時代や都市によって多様性や特色を有するものであったと考えられるのである。それゆえ、従来のような部分的議論をもって両国の関係あるいは文化的影響関係そのものを完結させることには問題がある。

そして先にも触れたように、とりわけ 1920 年代を中心とした大正・昭和初期日本の学界や思想界にとり、ハイデルベルクもまた非常に強い引力を有する重要な大学都市であった。それにもかかわらず、この時期ハイデルベルク大学との学術交流を主題的に論じた研究は、現在までのところヴォルフガング・ザイフェルトとその学生たちの手による調査を除いては存在していない[9]。しかもこの貴重な仕事もザイフェルト自身述べるように彼のゼミナールで編まれた小冊子であることも手伝って、時間と資料的制約の都合上、簡単な紹介の域を出るものではない[10]。そのため、その詳細については未だほとんど不明の状態にあるといってもよいであろう。

したがって以下小稿では、如上の問題状況と課題をふまえつつ、そのいわば基礎的研究として、ヴァイマール共和政期に当大学へ学籍を正規登録した日本人に焦点を当て[11]、その規模と性格なら

---

[6] Z.B. Friese 1990. Kreiner/Mathias (Hg.) 1990. usw. また、加藤 2008、 八木 2018 など。 なお、ドイツとの交流ではないが、同じくドイツ語圏であるオーストリアとの両大戦間期における交流については近年、ヴィーン大学の日本学科・日本学研究所が研究書を発表している（Vgl. Getreuer-Kargl /Linhart (Hg.) 2013）。

[7] Z.B. Friese 1980. Haasch (Hg.): 1996. Hartmann 2000. Derselbe 2003. usw. また、和田他編 2006、 葉 1998、 加藤 2008 など。なお、ここでは主に学術・文化交流の視点から両国の関係を扱ったもののみを取り上げる意図から、外交や政治的観点からの交流史研究に関しては原則除外をしている。

[8] 代表的な網羅的研究として、ルードルフ・ハルトマンの研究がある（Vgl. Hartmann 2005. Derselbe 2005: https://themen.crossasia.org/japans-studierende/ (zuletzt aufgerufen〔最終閲覧〕: 21.05.2021)）。そのほかライプツィヒ大学公文書館による調査研究も公開されていた（ Universitätsarchiv Leipzig (Hg.) 2011: Darin enthalten〔次の論文を含む〕: Blecher 2011: http://www.archiv.uni-leipzig.de/ual/150-jahre-deutsch-japanische-beziehungen/ (zuletzt aufgerufen: 13.09.2018)）。 加えて、たとえば以下のごとき研究が存在している。林正子「明治期ライプチヒ大学留学生によるドイツ思想・文化受容の意義」『岐阜大学 国語国文学』2004 年 12 月、松尾展成『日本＝ザクセン文化交流史』大学教育出版、2005 年、森川潤「ドイツ医学の受容過程-ミュンヘン大学留学生を中心に-」『教育学研究』1985 年 12 月、同『明治期のドイツ留学生-ドイツ大学日本人学籍登録者の研究-』雄松堂、2008 年、グルンヴァルト・エアハルト「ミュンヘン大学を中心とした医学における独日関係（1883 年から 1914 年まで）」『広島大学大学教育センター 大学論集』（別府昭郎訳）1991 年、朝治啓三「世紀転換期ミュンヘン大学で医学学位を取得した日本人」『関西大学文学論集』2016 年 12 月など。なお、以上のほかにも、望田幸男編『近代日本とドイツ-比較と関係の歴史学-』ミネルヴァ書房、2007 年や工藤章/田嶋信雄編『日独関係史』東京大学出版会、2008 年、また日独交流史編集委員会編『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂書店、2013 年、あるいは日本独学史学会による各研究をはじめ、日独文化交流の全般的な研究ないし留学生個人をめぐる個別研究としてはすでに多くの研究成果が存在することは言うまでもない。

[9] Seifert 2013. Vgl. auch Derselbe 2011: 308f.

[10] Seifert 2013: 7f.

[11] 小稿ではまずは当時期ハイデルベルク大学に正規学生として学籍を登録した日本人のみを取り上げている。しかしそれ以外にも同時期に聴講生として学籍を登録していた者も 21 名存在していた。そのなかには、たとえばドイツ文学者の高橋健二（Takahashi Kenji）や法哲学者の廣濱嘉雄（Hirohama Yoshio）、それに当大学へ学籍を登録した初めての日本人女性と考えられる伊原彌生（Ihara Yayoi）などの名前もみえる（Vgl. Gasthörer-Verzeichnisse von SS1918 bis WS1944/45. (UAH)）。なお、さらには、留学生たちの日記や回想を見る限り、こ

びに歴史的背景といった基本的事柄についてのみ、詳細を明らかにしておくこととしたい。もって、当時期留学の全体像をまずは事実的レヴェルで把握し整理しておくことがここでの目標である。なおその際、やはり新カント派（Neukantianer）との関係が重要な論点として浮上するであろうが、ここではザイフェルトの問題意識もひきつぎ、特にこれと社会科学との関係に対して注意を喚起しておくこととする。けだし、当時日本の哲学思想のみならず、社会科学領野での目覚ましい発展動向に眼を向けるならば、そこにこそ、ヴァイマール期ハイデルベルク大学との学術交流が近代日本の学知形成に対して有した特異な歴史的役割と意義もあったと考えられるからである。

2 ヴァイマール期ハイデルベルク大学への留学の規模

2.1 ヴァイマール期における日本人正規学籍登録者の総数と推移

そこで、まずはヴァイマール期ハイデルベルク大学に正規学生として学籍登録をおこなった日本人学生の総数とその推移を統計的に確認することから始めよう。ここに言うヴァイマール共和政期とはもちろん、年代的には十一月革命によって第二帝政が倒れその後ヴァイマール憲法が制定される 1918 年 11 月からナチスが政権を掌握する 1933 年 1 月までのおよそ 15 年間を指すが、これは大学のゼメスターで換算するならば WS1918/19 から WS1932/33 の 28 学期間に相当する。ではこの間、当大学に学籍を登録した日本人学生の総数と推移はどのようなものであったのであろうか。この点、先行するザイフェルトの成果も大いに参照しつつ、あらためてハイデルベルク大学公文書館（Universitätsarchiv Heidelberg: UAH）に保存される学生名簿（Verzeichnis der Studierenden: VdS）と新規学生の学籍登録簿（Immatrikulationsbuch: IMB）ならびに適宜、各学生の個人情報書類（Studentenakten: SA）を用いてより詳細な調査をおこなっておくこととしよう。その結果、まず WS1918/19 から WS1920/21 の期間には、第一次世界大戦期の国交断絶の影響によって学籍を登録した者は未だ存在していない[12]。そもそも、大戦後ドイツにふたたび留学生を送れるようになるには、1921 年 1 月のヴェルサイユ講和条約発効を俟たねばならなかったから、これは当然の結果であろう。しかるに講和条約発効後の SS1921 には早速、北吟吉（Kita Reikichi, 1885–1961）が哲学部に、つづいて島田武夫（Shimada Takeo, 1889–1982）が法学部に登録をおこなったのを皮切りに、20 年代初頭には一気に日本人留学生が増加することとなる。ただし、登録者のなかには当初登録だけをおこない、実際にはその後の受講を放棄あるいは中途放棄した者も存在する[13]。そのためゼメスターによっては実際に当該ゼメスターに終了時まで在籍した学生数が当初の登録総数とは大きく異なる場合がある。しかし通常、大学側は登録総数を公的数値として公表しているため[14]、ここでもゼメスターの修了、すなわち事実上の修学ではなく、登録行為をもって在籍者と見做すこととする。そのうえで、留学生の存在しない講和条約以前を割愛した登録数を表にすると次の表 1 のようになる。またこれに基づきヴァイマール期を通じた登録総数と新規登録数の推移をグラフにしたものが図 1 である。

のような学籍登録をおこなわずに当地に滞在していた者も相当数いたと考えられる。ただしこれら学籍の登録がなされていない者の正確な数については大学側の資料をもって把握することは困難であろう。

[12] ただし、ヘルマン・グロックナーの回想によれば、1920 年の夏に「若き経済学者」である「ハナト」という日本人とハイデルベルクの古書店で出会い、1921 年 3 月までドイツ語の家庭教師をおこなったという。これはおそらく、SS1922 に大学に学籍登録をする花戸龍蔵（Hanato Ryōzō）のことであろう（Glockner 1969: 229）。

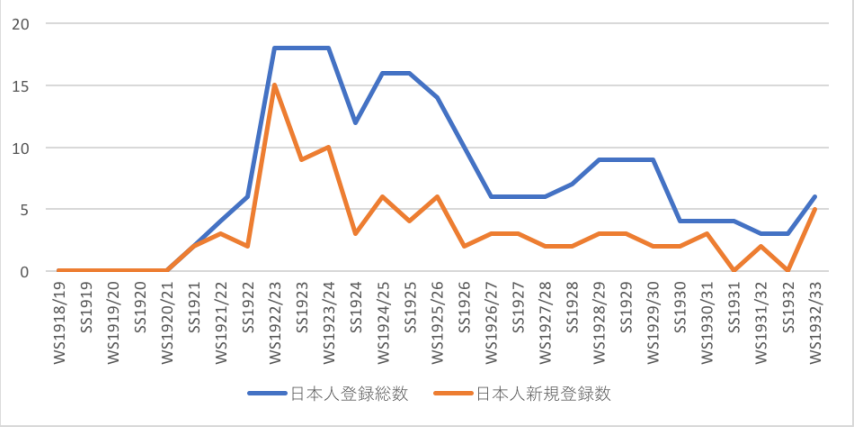
[13] S. VdS. (UAH). Ministerium des Kulturs und Unterrichts 1920: 8. par.20. (UAH).

[14] 大学はゼメスターごとに講義および教員一覧を作成しており、その末尾には前ゼメスターでの登録総数と国・地域別の専攻登録者数を掲載している（s. Badische Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg 1918–1933. (UAH)）。ただし、実際に VdS で日本人学生の登録数を数えてみると大学側の数値には誤りが見られる場合もある。したがってここで挙げた数値はすべて VdS に基づき久野が数えたものである。

表 1、ヴァイマール期ハイデルベルク大学への日本人正規学籍登録状況

ゼメスター	登録総数(旧植民地出身者を除く)	新規登録数(旧植民地出身者を除く)	ゼメスター終了時在籍者数	旧植民地からの新規登録数
WS1920/21	0	0	0	0
SS1921	2	2	2	0
WS1921/22	4	3	4	0
SS1922	6	2	6	0
WS1922/23	18	15	18	0
SS1923	18	9	16	1
WS1923/24	18	10	9	3
SS1924	12	3	12	0
WS1924/25	16	6	13	0
SS1925	16	4	12	0
WS1925/26	14	6	10	0
SS1926	10	2	7	0
WS1926/27	6	3	6	0
SS1927	6	3	6	0
WS1927/28	6	2	6	1
SS1928	7	2	7	0
WS1928/29	9	3	9	0
SS1929	9	3	9	0
WS1929/30	9	2	8	0
SS1930	4	2	4	0
WS1930/31	4	3	4	0
SS1931	4	0	4	0
WS1931/32	3	2	3	0
SS1932	3	0	3	0
WS1932/33	6	5	6	0
計	–	92	–	5

図 1、ヴァイマール期ハイデルベルク大学における日本人正規学籍登録数の推移



見てのとおり、ここからはヴァイマール期を通じて総計 92 名（帝国日本の旧植民地出身者を含めれば 97 名[15]）の日本人が正規学生として学籍登録をおこなっていたこと、ならびにその推移では 20 年代前葉に急激に登録者数が増加した事実を再確認できる。ちょうど日本における大正デモクラシーの最盛期[16]とも重なる WS1922/23 には一挙に 15 名の新規登録者を迎えている[17]。SS1924 には一時的に登録数が落ちるがこれはハイデルベルクに限らず当時日本の外国留学事情全般ともある程度通ずる傾向であり、直前に起こった関東大震災の影響であろう[18]。その後はふたたび登録総数は増加傾向をみせ、日本では昭和期に入る WS1925/26 ころからは減少、以後ゆるやかな増減を描きつつも国際状勢や世界経済が逼迫する 30 年代初頭には概して低い水準に留まるようになる。とはいえ 20 年代には毎ゼメスター新規登録者を迎えており、ヴァイマール期末期にも数名は常に在籍という状況であった。ちなみに、それではこうした数値とは当時日本からのドイツ留学としてはどの程度の規模であったのであろうか。次にはこの点をもう少し詳しく明らかにしておくため、当データを第一次大戦以前のハイデルベルク大学への留学状況、およびその他大学での状況と若干の比較をおこなっておくこととする。

2.2 第一次世界大戦以前（第二帝政期）および他大学との比較

すでに言及しておいたとおり、戦前を通じて日本からドイツに留学する場合、その最大の留学先は常にベルリン大学（フリードリヒ・ヴィルヘルム大学、現フンボルト大学 Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, die heutige Humboldt-Universität zu Berlin）であった。それではこのベルリン大学の場合、同じくヴァイマール期における学籍登録状況はどの程度であったのであろうか。この点、ルードルフ・ハルトマンによる調査に依拠しつつ確認しておきたい[19]。もっとも、ベルリン大学では SS1921 ならびに SS1922 の正確なデータが欠落している。そこでここでは便宜上 WS1922/23 から WS1932/33 の 10 年間での数値を見ておくと、この間、ベルリン大学には 163 名の日本人が正規学生として学籍登録をおこなっている（旧植民地からの留学生を除く）。先の表 1 を確認すればわかるとおり、ハイデルベルク大学における同期間での登録者数は 85 名であったから、これはハイデルベルク大学の 2 倍近くの数ということになる。ベルリン大学はやはり依然日本人にとっては最も重要な留学先であったといえようか。しかしながらそれ以外の大学となると事情をやや異にし、当時期ハイデルベルク大学と比べた場合、その数は比較的少数であったと考えられる。たとえば、第一次世界大戦以前には同じく多くの日本人が学んだ大学として知られるライプツィヒ大学（Universität Leipzig）の場合では、同 10 年間に学籍登録をおこなった日本人学生の総数は 15 名であった[20]。この数値はハイデルベルク大学への留学数に比して半分以下（-5.5 倍）の値であり、ハイデルベルクを大きく下回っていることがわかる。また、残念ながらいくつかのゼメスターでデータの欠落が見られるために通時的な比較ができないものの、ミュンヒェン大学（ルートヴィヒ・マックシミリアン

[15] 留学生のなかには中国人や韓国人でありながら、出身国を日本として登録した者が 5 名存在している。ただしここでは原則、これら旧、帝国日本の植民地学生は日本人学生には含めないこととする。

[16] 松尾 1987: 777。

[17] 大学はこれに、旧、帝国日本の植民地からの学生を含めた 22 名を公的数値として記載しているが、これは当ゼメスター全登録学生数の約 0.09 割、また全登録外国人学生数の約 0.9 割に相当している（s. Badische Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg 1918. Sommersemester 1924 (UAH): 24f. Vgl. auch Seifert 2011: 308）。

[18] 辻 2010: 33、八木 2018: 213。

[19] Vgl. Hartmann 2005. なお、和田他編 2006: 9–13、 加藤 2008: 24–33 も参照。

[20] Vgl. Universitätsarchiv Leipzig 2011. http://www.archiv.uni-leipzig.de/ual/150-jahre-deutsch-japanische-beziehungen/ (zuletzt aufgerufen: 13.09.2018).

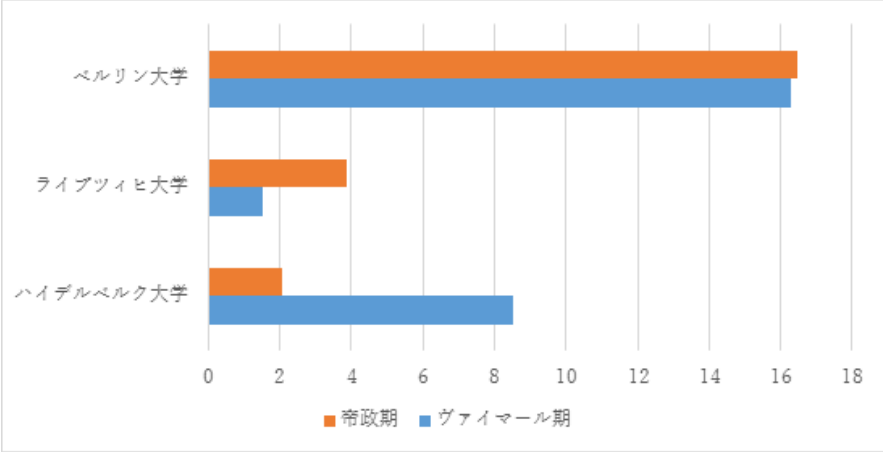
大学 Ludwig-Maximilians-Universität München）においては、大戦以前、当地はベルリン大学に次ぐ第二の留学先であったにもかかわらず[21]、20 年代では、基本的に多いゼメスターでも 3 名以内という低水準に留まっており、ハイデルベルクで急激に日本人登録者数が増加する WS1922/23 でもわずか 1 名の日本人が獣医学に登録したのみであった[22]。したがってベルリン大学以外の大学と比べるならば、当時期ハイデルベルク大学への留学率は比較的高かったことがここからはある程度推察されえるであろう。

ただし、ここで問題としたいのはこうした単純な登録総数の比較ではなく、むしろ大戦以前と比べた場合の留学生数増加の比率である。というのも、ヴァイマール期ハイデルベルク留学の特色の一端もまたそこにこそ表れていると考えられるからである。そこで今度は今取り上げた大学のうち、通時的比較が可能なベルリン、ライプツィヒおよびハイデルベルク三大学の大戦以前の登録数を確認すると、データの残存状況から開始年には数年のばらつきはあるものの、たとえばベルリン大学の正科では、WS1870/71-SS1914 の 43.5 年で 717 名の日本人が、またライプツィヒ大学では WS1873/74-SS1914 の 40.5 年で 157 名が学んでいる。これに対してハイデルベルク大学では WS1868/69-SS1914 の 45.5 年で 94 名が学籍登録をおこなっていた。ここからさらにそれぞれの計数を年数で割った 1 年ごとの平均登録者数を割り出すならば、ベルリンでは 1 年で平均 16.48 名、ライプツィヒでは 3.87 名の日本人学生が登録をおこなっていたのに対し、ハイデルベルクでは平均 2.06 名の学生が登録をおこなっていたことになる。つまりは、大戦以前においてはハイデルベルク大学への留学率は、ベルリン大学は言うに及ばず、ライプツィヒ大学と比較しても下回っていたのである。各界の知識人が多く籍を置いたことで知られる大学とは言いながらも、しかし第一次世界大戦以前の段階ではハイデルベルク大学への留学率は他大学に比べてそれほど際立って高いものではなかったといえよう。事実ハルトマンやヴォルフガング・シャモニの指摘によれば、ドイツ全大学中、大戦前でのハイデルベルク大学への留学率は未だ 6 番目にすぎなかった[23]。

しかしこれに対して、先に見た大戦後のヴァイマール期では数値が大きく変動している。すなわち、ベルリン大学正科における WS1922/23 から WS1932/33 の 10 年間での 1 年ごとの平均登録者数は 16.3 名、またライプツィヒ大学では 1.5 名であるのに対し、ハイデルベルク大学は 8.5 名であった。つまりベルリン大学においては、依然最大の留学先であることには変わりないながらも、大戦以前と以後で数値はほぼ同一でまったく変動していない。またライプツィヒ大学にいたってはおよそ半数以下（-2.58 倍）と大きく減少している。対して、ひとりハイデルベルク大学のみは約 4.5 倍の増加率に跳ね上がっている。言い換えるならば、わずか 15 年に満たない期間しかないにもかかわらず、ヴァイマール共和政期のハイデルベルク大学にはそれまでの帝政期を通じた過去 45.5 年間分の留学生総数（94 名）とほぼ同数の日本人留学生（92 名）が一挙に押し寄せていたのである。事態をより見易くするため、参考までにこれら三大学における第二帝政期を中心とした大戦以前とヴァイマール共和政期での年平均日本人登録数の増減を可視化しておくと図 2 のようになる（ヴァイマール期はいずれも WS1922/23 から WS1932/33 の 10 年間分）。

図 2、三大学における第一次世界大戦以前（第二帝政期）と
ヴァイマール期での年平均日本人正規学籍登録者数の増減

[21] Hartmann 2005: 235.
[22] Vgl. Ludwig-Maximilians-Universität München 1922/23. https://epub.ub.uni-muenchen.de/view/lmu/pverz.html#group_1922 (zuletzt aufgerufen: 08.05.2021).
[23] Hartmann 2005: 235. Schamoni 2011: 307. Seifert 2013: 10.



以上、十分な検討ではないながらも、ここからもハイデルベルク大学への留学とは他大学と比しても、とりわけ 1920 年代を中心としたヴァイマール期に急激な増加をみせたという特徴をあらためて確認することができるであろう。それでは、このような急増現象はなぜ起こったのであろうか。以上の事実をふまえつつ、次にはその歴史的背景を、既知の事柄の確認をも含めて順次指摘してゆくこととしたい。

3 ヴァイマール期ハイデルベルク大学における留学生数増加の歴史的背景

3.1 大正期日本における高等教育機関の拡充

そこで以下、早速この時期に日本人留学生が急激に増加した理由を探り整理しておくと、そこには主として四つの歴史的要因が存在したことを指摘できるかと思われる。

まずひとつ目として挙げられるのは、よく知られた大正デモクラシー期日本における高等教育の拡充という、当時日本の外国留学全般に関わる政策的事由である[24]。大正後半から昭和前半期に相当する 1920 年代とは、日本にとってはまさに高等教育機関全体の著しい拡充期にあたっていたのである。

もはや周知の史実ながら、立憲政友会を与党とする原敬内閣は、組閣と同時にいわゆる四大政綱を掲げ、積極政策によるその実現を試みた。そして、なかでも教育の拡充は原自身、その施政方針演説において、「第一は根本的方針として教育の改善を要す、方今数万の学生が教育機関不足の為め方向に迷ふあり、又国民教育の根本方針に於ても改善を必要とするあり、之に対して最善の方法を採らざるべからず。」と述べているように四大政綱中第一の目標として掲げられていた[25]。もちろんこうした政策展開の背景には第一次世界大戦の勃発によって日本経済が一時的に好景気へ転じたという事情もひかえていたが、このような国内状勢や経済事情に後押しされる形で、大正期高等教育の拡充は推進されていった。具体的には 1918 年、文部省臨時教育会議答申に基づいて大学令、ならびに高等学校令が公布されたことを機縁として、前者により新たに公・私立大学および単科大学が認可されると同時に、後者によって帝国大学予科としての機能を担う高等学校の整備拡充が図

[24] 加藤 2008: 21–23、 辻 2010、 竹内 2018: 276–279 など。
[25] 小林 1926: 503。

られる[26]。この結果、1920 年代を挟む 10 年間で旧制高校の数は従来のナンバー・スクール 8 校から 32 校へと飛躍的に増加した。またそればかりか、かかる増加はその卒業生の収容先たる帝国大学の増設をも促す事態となり、おおよそこの時期に四つの帝大が新設、既存の帝大でも新学部が増設されるに至っている[27]。さらに言えば、これに専門学校やその他大学予科といった文部省直轄学校の増設も含めればその拡張の規模は一層大きなものであったといえよう。

そしてこのような急激な高等教育機関の増設は、当然ながらそこに配属される教員の増員をも急務として要請することとなる。そのためこの時期、学校ごとに留学生の国外派遣を通じた教員の養成・充実が盛んにおこなわれることになったのである。かような事態は文部省による在外研究員派遣人数の推移からもある程度は窺い知ることができるであろう。毎年文部省専門学務局が作成していた『文部省在外研究員表』の巻末統計によれば、1918 年までは 50 名強以下で例年推移していた在外研究員の数が、1919 年以降倍増し、ピークとなる 1922 年では 200 名を超えている[28]。また実際、1921 年から 1922 年にかけて、マルティン・ディベリウス（Martin Dibelius, 1883–1947）[29]やハンス・フォン・シューベルト（Hans von Schubert, 1859–1931）[30]に学ぶべくハイデルベルクを目指した石原謙（Ishihara Ken, 1882–1976）も、当時を回想して次のように述べている。

> 大正八年以来中橋徳五郎文部大臣の高等諸学校増設拡張案が具体化して、既存の帝国大学には新しく学部乃至学科が増設され、同時に大学及び高等学校、専門学校の新設改善の案も実施を見るようになり、そのために若い教授の養成が急務とせられ、各大学が留学生を海外に派遣してこの計画に対応することになった。我々とほぼ同期の友人の中にも選に入って留学の途に上る者が相続いた。[31]

しかもこうした教員養成のための留学生派遣という動向は単に官立の大学や高等学校のみに限らず、この時期新たに大学に昇格した私学においても同様盛んにおこなわれていた。内閣統計局による『日本帝国統計年鑑』を見ると、修学を目的とした国外渡航用の旅券下付件数は 1922 年には急増して総勢 526 名を数えているが[32]、単純に計算して、そのうち 200 名強が今見た文部省からの官費派遣留学生であるとしても、残りの多くは官費によらない留学生ということになるであろう。そしてそのなかには私学からの派遣留学生も数多く含まれていたのである。一例として 1920 年に大学昇格を果たした日本大学を挙げれば、当大学では昇格と前後して、大学令に定められた専任教員の定数を満たすための留学生派遣が積極的におこなわれており、1923 年 2 月の時点で在外研究の任にあったものは 11 名、さらに 5 名の追加派遣が決定されている[33]。

---

[26] 旧制高等学校資料保存会 1982: 27–35。なお、この時期は学校自体の増設以外に、旧制高校のカリキュラムにおいても人文・社会科学系の科目が新たに設置され、これが旧制高校における文科系教員の増加につながっていたという。当時のいわゆる旧制高校教養主義が、このような制度的裏づけを持っていたという指摘は重要であろう（竹内 2018: 113 & 277–278）。

[27] なお、東北帝大の法文学部創設に際しては、京都帝大とともにハイデルベルク大学の文科系学部が主要参考例とされた（東北大学 1960: 191）。

[28] 1924 年版では 216 名となっている（文部省専門学務局 1924: 66 ）。辻 2010: 33 も参照。

[29] ドレスデン生。神学者。テュービンゲン大学やベルリン大学等で神学を学び、1915 年より 1947 年までハイデルベルク大学神学部正教授。WS1927/28 は同大学学長。新約聖書の研究者で、とりわけ福音書の様式史的批評の研究で知られる。Vgl. Drüll-Zmmermann 1986: 47.

[30] ドレスデン生。神学者。ライプツッヒ大学やボン大学等で歴史や文学史、法学・国家学等を学び、テュービンゲン大学等で神学を修めた。1906 年より 1928 年までハイデルベルク大学神学部正教授。聖書研究と歴史学を専門とし、教会史家としても知られる。Vgl. Drüll-Zmmermann 1986: 247.

[31] 石原 1979b: 31。安酸 2016: 261 以下。

[32] 内閣統計局 1924: 58–59。 季武 2012 も参照。

[33] 日本大学百年史編纂委員会 2000: 122–128。

もっとも、これらの数値はあくまで外国留学全体の数値であるが、しかし先に示した表 1 および図 1 から、20 年代ハイデルベルク大学における日本人学生の増加もおおよそではこれに対応していることがわかる。そしてヴァイマール期を通じた彼ら 92 名の全学籍登録者のうち、3 分の 1 弱に相当する 30 名は帝大や旧制高校、高商等から派遣された官費による文部省在外研究員であった（なお、そのほかに外務省や朝鮮・台湾各総督府から派遣された官費留学生も存在している）。同様、上で例示した日大からも同時期やはり 4 名の登録者を迎えているほか、慶応義塾や早稲田、立命館などその他私学から公的に派遣された留学生の姿も確認することができる。しかも、彼らはその大半が 20 代前半から 40 代前半までの年齢であり、文部省在外研究員総勢 30 名の平均留学時年齢は 34.9 歳、また学籍登録者 92 名全員の平均留学時年齢は 31 歳であった。ここからも当時、石原が言うように、いかに「若い教授の養成が急務」とされていたかを理解することができるであろう。

したがって、当時期ハイデルベルク大学の日本人急増に対し、かくのごとき大正期における高等教育拡充による国外派遣者数全体の底上げという事情が大きく与っていたことは間違いない。

3.2 ヴェルサイユ体制下ドイツにおけるインフレーション

またつづいて今度はドイツ留学全体に関して考えられる事由を指摘しておけば、これもまた従来言われてきたように、そこではやはりヴェルサイユ体制下での壮絶なハイパーインフレーションという経済的要因も忘れることはできない。今さら絮言を要すまでもなく、大戦後ドイツは総額 1320 億ゴールドマルクという巨額の賠償金の支払いや、フランスおよびベルギーによるルール地方の占領とドイツ側の非協力・賠償不供与による消極的抵抗、それに相次ぐ政府要人の暗殺と政権交代などといった政情不安によって物価が急騰し、未曾有のインフレを体験することになった。かかるインフレの凄まじさは当時ドイツの対外貨相場指数がこれをはっきりと示しているが [34]、それによれば 1922 年 1 月の段階では対ドル相場、45.7 であったマルクの価値は、翌年の 11 月には 1 兆マルクという天文学的数字にまで加速度的に下落している。なお、かようなマルクの急速な減価状況は、同時期留学中であった日本人学生たちの日記や書簡にも多くは対ポンド相場において克明に写し取られており、なかでも銀行口座からの出金記録という形でそれを記録した阿部次郎（Abe Jirō, 1883–1959）の日記はよく知られている [35]。しかしここでは、当時イギリスでの生活費との比較も交えながらハイデルベルクの物価を具体的に誌している安井誠一郎（Yasui Seiichirō, 1894–1962）の報告を聞いておくこととしよう。1923 年 8 月 10 日、現地からの便りである。

> 独逸は十日計り以前より又々マルク暴落致し昨今は一ポンドが五百万マルクに相成候。去年入国当時は一ポンドが千マルク余りなりしに比し大変なることに御座候。電車賃が片道伯林は九千マルク、ハイデルは六千マルクに候。郵便も昨日より外国は三千マルク、国内は千マルク、一度散髪すれば六万マルク、アイスクリーム一杯が二万五千マルク、一寸極まりたる夕飯を食へば三四十万マルクに有之、毎日物価変動する為内国人の定額収入者は大いに困り居候。（中略）戦前の一マルクが日本の五十銭なりし事を考へると気の毒のものに候。従ひて外国人にとりては生活費なども極めて安く百円もあらば日常の生活は贅沢に暮し申し候。（中略）之に引き換

[34] Vgl. Statistisches Reichsamt 1925. Stolper *et al*. 1964. Jürgen Jaksch 1994. usw.

[35] 阿部 1933: 13–14。 なお、阿部の留学期やその思想的影響の検討には、北住敏夫『阿部次郎と斎藤茂吉』上巻、桜楓社、1984 年や田中祐介「教養主義とノスタルジア-阿部次郎『徳川時代の芸術と社会』における江戸郷愁との訣別-」『季刊日本思想史』2010 年などがある。

> へ英国にては一ヶ月只食ふだけにて下宿の払ひが二百四五十円に相成る由にて、三百六十円貰ひ居る文部省の留学生は皆本も碌々買へず閉口致し居る由にて、結局英国の借金を独逸に来て埋め合せ致居り候。[36]

ここからは当時ドイツの不安定な物価変動の様子とともにドイツ国民、とりわけ中産階級の経済困窮がよく伝わってくるであろう。こうした壮絶なインフレが、ただでさえ大戦中、食糧危機にも喘いできた彼らの生活をいかに窮迫させたかは想像するに余りある。一方、これに対して安井の書簡でも言及されていたとおり、かかる通貨価値の下落は外国からの留学や外貨での生活に対しては必然的にきわめて有利に作用することとなった。そしてこのような経済事情が、官費私費を問わず日本からの留学生の渡独を促進するとともに、現地での多量の文献収集をも容易くしていたのである[37]。またそればかりか、たとえば九鬼周造（Kuki Shūzō, 1888–1941）がハイデルベルクにて新カント派の領袖、ハインリヒ・リッカート（Heinrich Rickert, 1863–1936）に個人授業を受けてリッカート家の家計を援けたように、当時経済的に窮乏していた大学教授や私講師に日本人が家庭教師を依頼し、個人的教授やドイツ語の訓練を直接受けるということも一般的であった[38]。したがってこれを三木清（Miki Kiyoshi, 1897–1945）の言葉を借りて要するならば、それはまさに「外国人にとつては天国の時代であつたが、逆にドイツ人自身にとつては地獄の時代であつた」[39]といえよう。

なお、同様の報告や証言は北昤吉や大内兵衛（Ōuchi Hyōe, 1888–1980）、天野貞祐（Amano Teiyū, 1884–1980）など、同時期、特にレンテンマルクの導入とシュトレーゼマン外交におけるドーズ案の採択によってインフレが終熄へと向かう以前に当地に学んだ留学生には数多く見受けられ、そこからは彼らがかようなドイツの惨状と自らの恵まれた身分を享受しつつも、同時に強い罪悪感をもまた覚えながら修学していたことが窺われる。

> 暖かな室のなかで、好きな書物を耽読して、自分の与へられたムーセを味ひつつある静寂な私のいまの生活の中から、纏ふ衣は破れ、暖を取るすべもなくて、この寒い空にふるえてゐる周囲の人々を顧みる時、私の魂は、ひとりイデーの世界に安住するに堪えずして、彼等の苦しみを苦しむやうに自己を責めることがしばしばであります。[40]

---

[36] 安井 1986: 345。

[37] 加藤 2008: 28。 東北大学 1960: 189 & 232–233 & 1010。 なお、大内兵衛によれば、この時期マルク安を利用してドイツに多くの日本人経済学者が赴き、ドイツの経済学関連の文献を大量に収集したことが、以後の日本でのマルクス主義隆盛の一因にもなったという（大内 1960: 122–123）。

[38] Glockner 1969: 232f. ちなみにグロックナーはそこで、自身が個人教授をした者として数名の日本人の名前を挙げている（ebd: 228f）。グロックナー自身はその大半をアルファベット表記で名字のみを誌しているが、それらは VdS と併せて考えるならば、花戸龍蔵（Hanato Ryōzō）、大峡秀栄（Ōhazama Shūei）、松原寛（Matsubara Hiroshi）、世良寿男（Sera Kazuo）、田岡嘉寿彦（Taoka Kazuhiko）、久禮田益喜（Kureda Masuki）、羽仁五郎（Hani Gorō）、赤松要（Akamatsu Kaname）、大江精一（Ōe Seiichi）、大江精三（Ōe Seizō）、岩崎勉（Iwasaki Tsutomu）と考えて間違いない。またそのほか、三木清（Miki Kiyoshi）もグロックナーの個人教授を受けている（加藤 1972: 178）。

[39] 三木 1966b [1942]: 412。内田 1996。 なお、三木の留学時代については、柴田隆行「三木清のドイツ留学生活」『井上円了センター年報』1997 年や、Yusa Michiko (1998): “Philosophy and Inflation. Miki Kiyoshi in Weimar Germany, 1922-1924”. In: *Monumenta Nipponica.* Spring,1998 なども詳しい。

[40] 小尾 1923: 98。

そして当時ベルリンに留学していた森戸辰男（Morito Tatsuo, 1888–1984）[41]の証言にもあるように、かかる悲惨な経済状勢や、そこで展開される活発な政治運動あるいは労働運動といった激動のドイツ社会の目撃から多大な刺戟を受けた日本の社会科学者は数多く存在したことであろう[42]。しかしそれは今は措くとしても、多数の留学生の証言に徴する限り、このようなヴェルサイユ体制下のインフレーションというドイツ特有の歴史的事情が、とりわけ 1920 年代前半におけるハイデルベルクを含むドイツでの日本人の留学生活全般を容易ならしめていたことは疑いえない。

3.3 戯曲『アルト・ハイデルベルク』の受容を通じた神話化

さて、以上挙げた 2 点は直接・間接に該時期日本人留学生の増加を促した大きな要因であった。ただしわかるとおり、これらは留学者数全体ないしはドイツへの留学者数全体の増加に関わる事由とは見做せても、それだけで特にハイデルベルク大学への留学者数が急増した理由を説明することはできない。実際先にも確認したように、同時期のドイツであっても平均増加率という点で見れば事情は同様でなく、ハイデルベルクのみが突出していた。それではなぜこの時期にとりわけ当大学に日本人が集中したのか。以下ではこの点をいささか事実的なレヴェルでではあるが、簡単に探ってゆくこととしよう。するとまずそこには、ひとつの間接的な要因として、当時旧制高校を中心とした青年知識層にヴィルヘルム・マイヤー・フェルスター（Wilhelm Meyer-Förster, 1862–1934）の戯曲『アルト・ハイデルベルク』（„Alt Heidelberg“）が浸透したという事実を指摘できるかと思われる。

すでに人口に膾炙しているごとく、当作品はハイデルベルクに遊学したザクセン・カールスブルク公国の皇太子カール・ハインリヒ（カール・ハインツ） と下宿先の可憐な少女ケーティーとのみじかくも美しい恋と学生生活を描いた物語である。これはもと『カール・ハインリヒ』（„Karl Heinrich“）という題の小説であったものを作者自ら戯曲に書き直し、1901 年ベルリンにて初演させて成功を博したものであった。爾来世界中で愛され、1922 年にはすでに映画化もおこなわれている。現在では原題よりもむしろ、その後当作品に準拠しつつ作られたオペレッタ『学生王子』（„Der Studentenprinz“）の名前で広く知られているといえようか。日本では 1913 年に文藝協会が題名を『思ひ出』として最初の上演をおこなったが、その後大正期に入ると、この作品はもとよりドイツ語やドイツ人文学の修学をその教養主義文化の必須要素とした旧制高校で教科書に使用されるなど、知識青年の間に必読書のひとつとなって広い普及をみせることとなる[43]。

しかもその際重要なことは、彼ら旧制高校生たちがそれを単にドイツ語やドイツ文学のテキストとしてではなく、主人公カール・ハインリヒの青春に自らの学生生活を重ね合わせる形で受容していたことである[44]。したがってそこでは、ハイデルベルクという名前はただ風光明媚な異国の地名であるに留まらず、彼ら自身の学園や自治寮での生活の代名詞ないし象徴的符号としてこそ用いられた。つまりそれは彼らにとり、まさに自らの「白線帽の青春」そのものにほかならなかったの

[41] 広島生。経済学者、社会思想家。1916 年、東大助教授に就任。クロポトキンの翻訳をめぐる森戸事件で辞職ののち大原社会問題研究所に勤務。戦後、日本社会党の設立に参画してのち文部大臣となる。1950 年には政界を退き、広島大学学長を務めた。東大助教授時代と大原社会問題研究所時代にそれぞれドイツ留学を経験。

[42] 森戸 1972: 119。八木 2018: 220 も参照。

[43] なお、当作品は番匠谷英一（Banshōya Eiichi）によってよく訳されたが、そこに登場するケーティーの詩には、のちの 1941 年、旧制水戸高等学校の和田瑞男（Wada Tamao）によって曲が付され、「アルト・ハイデルベルク」という題で全国の旧制高校生をはじめとする多くの青年子女に愛唱されるところとなった（石井 1992: 96–97）。

[44] この点に関しては、依岡 2013: 335–339 も参照。

である。典型的な例をひとつだけ挙げておけば、旧制浪速高等学校の記念祭歌の一曲である「吾等の歌（Ⅰ）」（1930 年）では次のように謳われる。

> 池の水蒼む五月 我等が時ぞ 緑深き樹蔭こそ 夢多き我等が楽園ぞ 待陵我等のハイデルベルヒ[45]

ここにはハイデルベルクを青春の故郷として理想視し、そこへ母校、浪高での学生生活を同定する姿勢が顕著に表れている。歌詞の背後に「諸君、人生を享楽したまへ。時は五月だ。我等は若い。そしてこゝはハイデルベルクだ。」[46] という『アルト・ハイデルベルク』における華やかな青春のイメージがひかえていることは明らかであろう。

そして、かような当作品に描かれた青春の情景への憧れは、当時ドイツ本国においてもそれが「ロマンティックなハイデルベルク」というイメージ形成に大きく寄与したように[47]、自然、彼らにその舞台たる美しい南ドイツの古都や、また作中カール・ハインリヒも学んだハイデルベルク大学に対する憧れをも連鎖的に喚起せずにはおかなかった[48]。1920 年代当時、東京帝大の学生であった映画評論家・制作者の岩崎昶（Iwasaki Akira, 1903–1981）[49]が羽仁五郎（旧姓・森）（Hani Gorō, 1901–1983, ursprünglich: Mori）の当地留学について語った文章はこの事実をはっきりと物語っている。

> 一高を出て、森五郎がドイツへ留学したということは、私はもちろん知っていた。彼が三木清とともにハイデルベルク大学でリッケルト教授のもとで哲学を勉強して、すぐれた業績を上げていることはすでに東京でも喧伝されていた。ベルリン大学でもミュンヘン大学でもなく、ハイデルベルク大学だということがこの場合、大切であった。これは日本では特別な大学であった。手っ取り早くいえば、すべての高等学校や大学生のあこがれの大学であった。というわけは、『アルト ハイデルベルヒ』（『思ひ出』とも訳されていた）という芝居のせいであった。[50]

さらにつけ加えれば、このように、当作品の受容を通じてなかば神話化された形で育まれた当地へのメルヒェン的なまでの憧れとは、決して現役の学生だけに限られたものではなく、同様の学生時代を経てきた石原謙の言う「若い教授」たちの間でもある程度共有されていたと言える。それは次のようなある旧制高校教授によるハイデルベルク便りひとつをとっても瞭然であろう。

> ハイデルベルク—この名をきくと、私は昔から一種の憧憬を感じないではゐられませんでした。その名だけが已に私には、一つの詩であつたといつてもいい位です。緑なす山々の姿、紺碧なネッカーの流れ、南独逸の青い空、綺麗な感じのいい町、リンデンの並木路、ひくい柴垣でも両側にあり相な静かな散歩道、「アルト ハイデルベルク」のケーテのやうな可憐な少女、ヘーゲルやクノーフィッシャーのゐた古

---

45 浪高歌集編集委員会 2000: 39。 なお、待陵（Tairyō）とは大阪の待兼山麓にあった浪高の愛称である。
46 Meyer=Förster 1903: 35. マイアー・フェルスター（番匠谷訳）1935: 54。
47 Vgl. Fink 2002. Vgl. auch Schneider 1994: 75.
48 瀧川幸辰（Takikawa Yukitoki）も「ハイデルベルクといへば、若い人達は直ちに W・マイヤー・フェルスターの『アルト・ハイデルベルク』という芝居を思出すであらう。（中略）若い時代にあの脚本を読むと（中略）ハイデルベルクはどんなに美しい町だらうと一種のあこがれを感じる。」と述べている（瀧川 1937: 162）。
49 東京生。左翼的映画人として知られる。一高、東大を経て、のちプロレタリア映画同盟に参加。1940 年には唯物論研究会事件で治安維持法抵触の廉で検挙される。1946 年、日本映画社の製作部長に就任。GHQ のパージ後は 1950 年に新星映画社を数名で創設、多数の映画を作成した。
50 岩崎 1980: 228–229。

> い学都、自分に「詩」や哲学への愛を培つてくれた「序曲（プレリューディエン）」の著者（ヴィンデルバントー引用者）ーさういふ想像によつて、私は勝手にハイデルベルクといふ、一つの形象をこしらえ上げてゐたのです。[51]

このように見てくるならば、実に『アルト・ハイデルベルク』の作品世界こそは、当時旧制高校生を中心とした若き知識層にハイデルベルクやハイデルベルク大学への憧憬を育む培養基であったことは明らかといえよう。ハインリヒ・ヤーコプ（Heinrich Jacob, 1889–1967）[52]もまたその同時代小説『ジャクリーヌと日本人』(„Jacqueline und die Japaner“) のなかで活写していたように、それはまさしく、当時の「日本人にとってはすばらしい作品」[53]であったのである。そして前にも指摘したとおり、1920 年代とは折しもこの旧制高校をはじめとする高等教育機関の拡充期にあたっており、その教員や卒業生も多数ドイツへと赴いていた。その意味では、当時期当大学への留学者数の増大という現象を考える場合、ひとつの遠因として、以上のような大正期日本における当作品の受容をめぐる特異な精神史的土壌の存在を無視することはできないであろう。

ただし、もちろんそうは言いながらも、留学が仮にも学問研究を目的とするものである以上、単にこうした夢想的な憧れやイメージだけで多くの日本人が当地を目指したわけでは決してあるまい。むしろより直接には一層学術的な要因が強く働いていたはずである。そしてとりわけこの時期の当地留学者数増加に大きな影響を与えた最大の要因こそは、岩崎や吹田順助（Suita Junsuke, 1883–1963）[54]による記述にも登場していたように、クーノ・フィッシャー（Kuno Fischer, 1824–1907）からヴィルヘルム・ヴィンデルバント（Wilhelm Windelband, 1848–1915）、そしてハインリヒ・リッカートあるいはエミール・ラスク（Emil Lask, 1875–1915）へと受け継がれたハイデルベルクにおける新カント派、すなわち西南ドイツ学派（Südwestdeutsche Schule）（バーデン学派、ハイデルベルク学派）の学統にほかならない[55]。

3.4 大正期日本における新カント派の隆盛

もっとも、明治末から大正期日本における新カント派の受容と興隆については、これまでにも近代史研究や思想史研究においていわゆる大正デモクラシーを彩る思想として頻繁に言及をされてきたところであり、とりわけ近年では哲学研究の分野にて多くの研究蓄積と近代日本での役割再評価の動きが見られる[56]。したがってここでは斯学派の学問的内容につき縷説することは差しひかえたい。ただし、先験的認識論と価値関係主義に基づくその文化哲学、そしてこれによって基礎づけられる

---

[51] 吹田 1921: 80-81。

[52] ベルリン・フリードリヒシュタット生。ジャーナリスト、作家。ベルリン大学にてドイツ学や文学等を学んだのち主にベルリンやヴィーンで活動を展開。のち、反ナチス思想のために著作が発禁となり拘束される。釈放ののちには家族とともにアメリカ合衆国に移住して活動した。

[53] ヤーコプ（相良訳）1952: 85。 なお、当該作品の日本語訳出版時には、1923 年当時フリードリヒ・グンドルフに学ぶべくハイデルベルク大学に留学中で作者とも交際のあった成瀬無極（Naruse Mukyoku）が尽力した。実際成瀬は 1952 年の日本語訳再刊に際してもその解説を執筆し、留学時におけるヤーコプ夫妻との交流を回想している（成瀬 1952）。

[54] 東京生。ドイツ文学者。東大卒業後、北海道帝国大学予科や山形高等学校、東京商科大学等の教授を歴任。ヘルダーリンやヘッベルの研究で知られる。山形高等学校教授時代にドイツ留学を経験。

[55] Vgl. Wiehl 1985: 413f. 天野 1971b も参照。 なお、ここではハイデルベルクと近代日本の関係を扱う関係から、便宜上、特に「西南ドイツ学派」を指して新カント派と称することとする。

[56] 近年では大橋容一郎らによる研究により再評価が進められている。大橋 2008、 同 2015、 同 2016a、 同 2016b、同 2017、 同 2018a、 同 2018b、 宮島 2019、 同 2020 など。 なお、門脇 1989、 清水 1994 も参照。

文化科学という方法論が、当時ドイツにおける人文・社会科学の自然科学からの自律と個別的発展に対して大きな役割を果たしていたことについては再度ここで強調しておいてもよいであろう。そのような動向は近代日本の学知形成に対してもまた多大な影響を及ぼしたからである。

よく知られるとおり、19 世紀後半のヨーロッパとは、産業革命に呼応した重工業や化学への需要の高まりを契機とする自然科学諸学の発展が目覚ましかった時期にあたり、そこでは実証主義的な自然科学の方法論こそが科学全般の普遍的モデルと見做されるに至る。同時に、これと相牽連する形で資本主義が急速に発達し、市民層が抬頭する一方、それがもたらす社会的矛盾が顕在化するという状況も迎えていた。そしてかような状況を背景として、すでに一連の大学史研究が詳らかにしているように[57]、この時期以降ドイツの大学では、自然科学を専修する学生の数が増大、その結果、総合大学において神・法・医・哲という従来の伝統的な四学部編成体制が動揺を来してゆくこととなる。すなわち、新たに理学部（自然科学部）が設置されることにより、とりわけ 19 世紀を通じて数学・自然科学諸講座をも内に含みながら拡大を遂げてきた哲学部が縮小、再編されるという事態に直面するのである。しかもこうした動向は、1863 年、ドイツで初めて四学部体制を脱却して理学部を設置したヴュルテンベルクのテュービンゲン大学（エバーハルト・カール大学 Eberhard-Karls-Universität Tübingen）を筆頭に、西南ドイツ地方の大学に顕著であった。バーデンのハイデルベルク大学でもまた同様に、テュービンゲンやシュトラスブルクにつづいて 1890 年代には自然科学諸講座が従来の哲学部から独立、新設された理学部へと再編成されることで哲学部は縮小を余儀なくされた。そのため、人文・社会科学の側では、一方で資本主義的な諸矛盾の克服を自己の新たな課題として課するとともに[58]、他方、このような自然科学の著しい発展と大学の構造変革といういわば人文知の危機に際し、自然科学にあらざる自らの学問的価値と権利の基礎づけを試み、独自の方法論を追求するという実際上の必要に迫られたのである。かような情況において当時ドイツでは実証主義や経験主義に対抗する理想主義の復権が目指されるとともに、方法をめぐる活発な論争も展開されるところとなるわけである。19 世紀末葉のハイデルベルク大学における西南ドイツ学派や、これと密接な影響関係にあって、「ハイデルベルクの神話（Heidelberger Mythos）」などとも称されたマックス・ヴェーバー（Max Weber, 1864–1920）らによる旺盛な活動と業績もまた、まさにこうした文脈のなかで把えることができるといえよう。

一方、かかるドイツ側の事情に対して、当時日本においてもまた、日本独自の歴史的事情からやはり人文・社会科学への関心が著しく高まっていた。その事情とは、通説的な理解に従って一言で言い表すならば、かつて飯田泰三によって提示された、「社会の発見」あるいは「社会と人間（自我）の発見」と称される現象である[59]。周知のとおり、日露戦争の勝利によって日本は西欧列強に比肩するための富国強兵と近代化という国家目的を達成、かくて一応は近代国家としての離陸を果たすこととなった。そしてこれにより、明治期以来の国家主義的で対外膨張的な志向性は一旦弛緩し、結果、それは青年層を中心とした知識階級に、国家的価値とは異なる、個人の自我や内面、あるいは自由、生命、恋愛、生活などといった、いわゆる人間に眼を向けさせてゆくこととなったのである。旧制高校における内省的な「大正教養主義」の生成もこれに伴ってのことであり[60]、ひ

[57] 潮木 1973、別府 1973、同 1974、同 1975、同 1977、同 2016。
[58] 岸川 1983a、同 1983b。
[59] 飯田 1997: 194–221、同 2017、有馬 1999: 272–326。
[60] ここで言う「大正教養主義」とは、大正期に知識層の間に形成され流行した、哲学や文学を特に重視した人文学の古典遍歴と思索によって人格の陶冶を目指す思想・態度を指す。その前提には日本独自の修養主義があるとも言われる。かかる潮流は主としてラファエル・フォン・ケーベルの影響を受けた、漱石門下の阿部次郎（Abe, Jirō）や和辻哲郎（Watsuji, Tetsurō）らによって広く伝播されたが、これはもとより人格や文化価値といったものを通じて人格主義や文化主義、ひいては新カント派思想とも強い親和的性格を有していたと言える（筒井 1995、竹内 1999、同 2003 参照）。

いては、かの『アルト・ハイデルベルク』の浸透もまた、かような心性の変化と無関係には考えがたい。しかも、これにつづく第一次世界大戦においては、日本は大戦特需による空前の好景気等を通じて今度はかつてのドイツ同様、国内の資本主義経済を急速に成長させた。しかしこうした資本主義の急成長は当然ながら格差や貧困、あるいは労働問題といった深刻な社会問題を顕在化させ、それは知識層をして国家とは異なり、それを相対化するものとしての社会の存在を本格的に発見せしめることとなったのである。飯田によればこの二つの発見によって以後、従来の「明治ナショナリズム」は解体へと向かうわけであるが、まさにこの「社会と人間の発見」こそが、当時日本のアカデミズムや思想界に人間を対象とする人文科学や、あるいは社会を問題化して主題に据える社会科学へと新たに注目させるための歴史的かつ思想的な条件を用意したといえよう[61]。そのため、かような背景と関心、また社会変革への志向性を広く共有した日本の知識人たちが、既述の事情から文化科学独自の意義を唱導していた新カント派の方法論に注目をしたことは、その理想主義哲学の側面とも相俟ってごく自然な成りゆきであったとも言える[62]。そしてその際、西南ドイツ学派ないしバーデン学派という呼称がすでに表しているとおり、その震源地の一角こそはまさしくここハイデルベルク大学にほかならなかったのである。

かくして、大正期に入ると、斯学派の修学を求めてその拠点たる学都ハイデルベルクに多くの留学生がなだれ込む、いわゆる、ハイデルベルク詣でと称される現象が起こることになる。そしてそれはまずなにより、リッカート自身、「数年来、日本の学者たちが私とともに哲学を学ぶべく、毎学期ハイデルベルクにやって来た。」[63] と述べているように、広く西洋哲学から仏教学[64]までを含む、哲学・思想の分野でこそ著しかった。ただし、こうした新カント派と特に日本の西洋哲学研究との関係についてはすでに比較的よく知られたところでもあるので、さらなる検討の余地があるとはいえ、紙幅の都合上ここでは敢えて深くは立ち入らない。

その代わり今ここで注目しておきたいことは、それが有した社会科学領野に対する影響力である。上でも見ておいたように、このリッカートと新カント派は、単に哲学を学ぶ者のみならず、「社会の発見」を経た若き日本の社会科学者たちからも大いなる関心をもって迎えられていた。その先鞭をつけたのは早くも大戦前に渡独して西南学派の理論を経済学に適用していた左右田喜一郎

[61] 川合 2016、 同 2017。

[62] このような要因に加えてさらに、石田雄は、「新カント派隆盛の原因ともみられるものとして、知識人の間における大正教養主義と、その中にみられる哲学的志向が新カント派方法論の輸入に有利な精神的雰囲気を醸成していたことが指摘できる」と述べている（石田 1984: 100）。ここで石田の言う、新カント派に先立つ哲学的志向とは、上でも見たケーベル、オイケン、ベルクソンの影響を受けた当時の思想潮流、すなわち、大橋の言葉を借りれば、「広義の教養主義」（大橋 2018b: 220–223）と重なるものであろう。また西南学派の方法論に限らず、当時新カント派全般が日本の知識層に浸透した理由として、たとえば、宮川透は、新カント派の認識論哲学を、ビスマルクによる国家統一を通じて飛躍的発展を遂げた後進資本主義国ドイツにおける中産階級の哲学と性格づけたうえで、ドイツと同様、日清・日露戦争の勝利を通じ帝国主義的国家として抬頭しつつあった日本の中産階級の側にもそれを自己の哲学として受け入れる物質的根拠と客観的基盤があったことを挙げている（宮川 1956: 203）。さらに広川禎秀は、当時日本の知識人たちが直面していた問題として、「市民的自由と資本主義的矛盾への同時的解決」という課題を挙げ、こうした時代状況と問題意識こそが、日本における社会思想としての新カント派受容の背景をなしたという指摘をおこなっている（広川 2004: 104、 同 2006: 77）。

[63] Rickert 1924: vii.

[64] 仏教学、東洋思想研究に関して言えば、この時期、インド学的方法や文献学を学ぶことで直接原典を研究するという、いわゆる近代仏教学を習得するため多くの仏教学者がヨーロッパに赴いている。そのためハイデルベルクにも多数の仏教学徒を見出すことができるが、彼らにとって当地での最大の目的は当時著名な仏教学者であったマックス・ヴァレザーであった（大江 1982: 1、 谷口 2008: 40–44、 西村 2013）。しかし彼ら仏教学徒にしてもやはり同時にリッカートや新カント派には強い関心を有しており、実際その講義にも出席をしていた（友松 1989）。

（Sōda Kiichirō, 1881–1927）[65]であったが、爾来その影響下、三木清が「左右田博士の影響によって、その頃からわが国の若い社会科学者、特に経済学者の間で哲学が流行し、誰もヴィンデルバント、リッカートの名を口にするようになった」[66]と指摘するように、経済学を中心として諸社会科学を学ぶ学生や若き研究者たちの間でも新カント派は絶大な支持を受けるようになっていたのである[67]。土田杏村（Tsuchida Kyōson, 1891–1934）[68]に言わせれば、「左右田の企図以後、それに刺激せられて、これらの諸社会科学の研究に随ふものは、争うてその方法論的基礎をリッカアトの哲学に得ようと努めた」[69]といえよう。そして事実、石田雄も評価しているとおり、かかる新カント派方法論の導入は当時日本の社会科学界に対して、以後、個別の諸社会科学が自律的に分化発展することを可能にしたばかりか、さらにはそうして分化してゆく諸社会科学に共通の認識論的基礎を提示することで諸学間の交流を可能にするという重要な貢献までもなしたのであった[70]。

したがってこの時期、多くの社会科学者もまた同じく当地を目指すこととなり、これを裏づけるように20年代のハイデルベルクにおいては、随所で彼ら日本の社会科学者たちとリッカートを中心とする新カント派との接点を見出すことができる。一瞥を与えただけでも、たとえば20年代初頭、エミール・レーデラー（Emil Lederer, 1882–1939）[71]のもとで国民経済学を修学していた大内兵衛は、統計学者の糸井靖之（Itoi Yasuyuki, 1893–1924）とともに現地の原書講読会でマルクスやエンゲルスなどとならびまずはリッカートの著作を取り上げて精読している[72]。同じく経済学者の藤田敬三（Fujita Keizō, 1894–1985）は経済学のレーデラーや社会学のアルフレート・ヴェーバー（Alfred Weber, 1868–1958）の講義とならべてリッカートの講義を聴講希望講義として大学へ申請し[73]、同様、赤松要（Akamatsu Kaname, 1896–1974）もまた左右田の源流を訪ねてリッカートらのゼミナールに熱心に参加していた[74]。ほかにも、自らは商法や会社法を専門とする法学者であった田岡嘉寿彦（Taoka Kazuhiko, 1894–1985）や、あるいは同様に法科生としてゲアハルト・アンシュッツ

[65] 神奈川生。経済学者。東京商科大学卒業後、ヨーロッパに留学。ドイツではフライブルク大学やテュービンゲン大学に学びリッカートらに師事した。1909年、テュービンゲン大学にて国家学博士の学位を取得。帰国後は講師として東京商大や京大の教壇に立つかたわら、家業である左右田銀行の頭取も務めた。日本における経済哲学の創始者、また大正期文化主義の理論的旗手として著名。

[66] 三木 1966b [1942]: 74。

[67] 当時自由主義的思潮の中心にあった1910年代末葉から1920年代初頭の京都帝大法科でも、恒藤恭（Tsunetō Kyō）や栗生武夫（Kuryū Takeo）、田村徳治（Tamura Tokuji）、森口繁治（Moriguchi Shigeharu）ら若き法学者の間で、西南ドイツ学派・マールブルク学派の両学派を含めた新カント派の方法論とその理想主義に対する高い関心が広く共有されていた（広川 2004: 112–113）。

[68] 新潟生。哲学者、評論家。京大卒業後、雑誌『文化』を発行して文化、思想から社会問題まで多方面にわたる評論、著作活動を展開。大正期文化主義の理論的旗手のひとりとして見做される。また長野県での自由大学運動を主導したことでも知られる。画家の土田麦僊 (Tsuchida Bakusen) は実兄にあたる。

[69] 土田 1935 [1926]: 145。 ただし杏村はそこでそれがもたらした学問の官僚的弊風という問題も指摘をしている。

[70] 石田 1984: 100。

[71] ピルゼン（プルゼニ）生。経済学・社会学者。ヴィーン大学で経済学ならびに法学を学び、1912年にハイデルベルク大学で教授資格を取得、のち同大学にて正教授として1931年まで社会政策学等を講じる。1923年から1925年までは東京帝大に招聘されて渡日。帰国後はアルフレート・ヴェーバーとともにハイデルベルク大学社会・国家学研究所の所長を務めた。1933年アメリカへ移住し、ニューヨークで教壇に立った。20世紀前半において最も重要なドイツの経済学・社会学者に数えられる。Vgl. Drüll-Zmmermann 1986: 158.

[72] 大内 1948 [1925]: 135、 同 1960: 129。

[73] SA: Fujita Keizō (1922): „Antrag auf Zulassung zum Studium an der Universität Heidelberg“. 12.September 1922. (UAH).

[74] 赤松 1975 [1967]: 27。 なお、赤松の留学期の理論的影響に関しては、ほかに池尾愛子『赤松要-わが体系を乗りこえてゆけ-』（『評伝 日本の経済思想』）日本経済評論社、2008年や、平川均「赤松要と名古屋高等商業学校-雁行形態論の誕生とその展開に関する一試論-」『経済科学』2013年3月などが詳しい。

（Gerhard Anschütz, 1867–1948）[75]やリヒャルト・トーマ（Richard Thoma, 1874–1957）[76]に学んだ憲法学者の清宮四郎（Kiyomiya Shirō, 1898–1989）にしても、その回想においてリッカートについては特別に言及をおこなっている[77]。これらを要するに、20 年代当時、哲学を主専攻とはしない社会科学修学生たちでもやはりその著書には目を向け、あるいは一度は留学中その講筵に列するほど、リッカートと新カント派の名は日本の社会科学界においても広く知れ渡っていたと言えるであろう。

そのため次には、如上の事態を数値のうえでも確認すべく、VdS ならびに IMB によって当時期留学の全体的な性格を概観しておくことにしたい。そのうえでそれらをふまえつつ、最後にあらためてその歴史的意義についても指摘をおこなっておくこととしよう。

4 ヴァイマール期ハイデルベルク大学留学の性格とその意義

4.1 日本人留学生の属性と学部分布に見られるヴァイマール期留学の性格

先にも少し触れたように、これまでにも、大戦を挟んだこの時期、多くの日本人が当地に学んだであろうことについては度々言及をされてきた。しかしながらその正確な実態、すなわち、では具体的にはどのような人物がなにをここで学んだのかという段になると、ザイフェルトらによる紹介以上のことは従来まったく不明であった。そこで今回、VdS ならびに IMB の調査に基づいて正規登録学生の全容と属性を一覧にしたものが、本論末尾に掲載しておいた表 2 である。

見てのとおりそこには多彩な顔ぶれが見受けられるが、新カント派の引力という事実とも吻合して、西洋・東洋の分野を問わず、哲学・思想研究を主専攻とする者の数がきわめて多いことはここでもまず眼に留まる。しかし、かような事態とならんでここで止目すべき重要な点は、やはりそこには経済学や法学といった社会科学専修の学生が数多く見受けられるというもうひとつの事実であろう。とりわけ哲学や官房学において経済学を専攻する者はかなりの数にのぼっている[78]。むろんこれには、高等教育の拡充に伴ってこの時期、日本に高等商業学校が増設されたという事情も大きく関係しているであろう。高商の増設は経済学や商学の教員充足を要請し、結果、当分野においては帝大以上に高商からの留学が多く見受けられた[79]。ハイデルベルク大学においても花戸龍蔵（Hanato Ryōzō, 1891–?）や藤田、赤松など留学前後に高商の教員であった経済学あるいは財政学者たちの姿を容易に見出すことができる。しかしそうした事情を抜きにしても、すでに指摘したとおり、当時経済学分野でも新カント派は多大な影響力を有しており[80]、それがここには直截な形で反

[75] ハレ生。公法学者。ライプツィヒやベルリン、ハレ大学等で法学を学び、1900 年より 1908 年、および 1916 年から 1933 年までハイデルベルク大学法学部正教授。WS1922/23 は同大学学長。その他テュービンゲン大学やベルリン大学等でも教鞭を採った。ヴァイマール期ドイツを代表する公法学者であり、ヴァイマール憲法ならびにヴァイマール自由主義の理論的支柱の一人に数えられる。Vgl. Drüll-Zmmermann 1986: 4.

[76] トートナウ生。公法学者。フライブルク、ベルリン、ミュンヘン各大学で法学を学び、テュービンゲン大学を経て 1911 年より 1928 年までハイデルベルク大学法学部正教授。アンシュッツとともに、ヴァイマール期ドイツの指導的公法学者としてヴァイマール自由主義を擁護した。Vgl. Drüll-Zmmermann 1986: 268f.

[77] 田岡 1960: 12。 清宮 1979: 92。 なお、清宮のハイデルベルクおよびヴィーン留学時代とその理論的影響については、石川健治「コスモス-京城学派公法学の光芒」酒井哲哉編『「帝国」日本の学知』1 巻、岩波書店、2006 年、同「「京城」の清宮四郎-『外地法秩序』への道」酒井哲哉/松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014 年などが検討をおこなっている。

[78] なお、ハイデルベルク大学においては 1920 年代後半以降になって新たに Staats-und wirtschaftswissenschaftliche Fakultät（国家・経済学部）が創設される（別府 2016: 213）。

[79] 八木他 2018: v。

[80] 西南学派の経済学方面への影響について、たとえば山本英一（Yamamoto Eiichi）は次のような証言をおこなっている。「私が仙台の大学に入学したのは、昭和のはじめ、二年の春である。その頃はフッセルの現象学

映をしていると言える。そもそも、リッカートに学び西南学派の理論を体系的に導入した左右田その人からして彼は経済哲学者であった。そのため彼ら経済学や財政学専攻の学生にしても同じく、花戸や赤松らがリッカートやオイゲン・ヘリゲル（Eugen Herrigel, 1884–1955）、あるいはヘルマン・グロックナー（Hermann Glockner, 1896–1979）[81] の勉強会やゼミに熱心に参加したように[82]、多くは当地にて新カント派との深い関わりを有していたのである。

さらに言うならば、かような事情は、つづいて多く見られる法学や国家学を専修する法科生に関してもやはりある程度は同様であった。もっとも、法学部に関して言えば登録者数が多いことは大戦以前から一貫する傾向であり、その背景にはもとより当地がヨハン・カスパー・ブルンチュリ（Johann Caspar Bluntschli, 1808–1881）やゲオルク・イェリネック（Georg Jellinek, 1851–1911）らを擁したドイツ公法学のメッカであったという事情が大きく与っている[83]。しかし同時に、この時期には田岡や清宮がリッカートに注目し、刑法学の久禮田益喜（Kureda Masuki, 1893–1975）が哲学の高橋里美（Takahashi Satomi, 1886–1964）や務台理作（Mutai Risaku, 1890–1974）らとともにアウグスト・ファウスト（August Faust, 1895–1945）[84]やグロックナーの勉強会に参加していたごとく[85]、その多くは新カント派という磁場とも決して無関係ではなかったといえよう。

なお、厳密なものではないが、如上の事態をより視覚的に示すため、自然科学と人文・社会科学の登録比率を示す目的で、便宜上全登録者の専攻別割合を図示したものが図 3 である[86]。また図 4 は同様に、当時実際の学部編成にはとらわれず、大戦以前における各登録専攻の分布を示したものである。特に既述のとおり当大学では 1890 年までは数学・自然科学の諸講座（nat-math.）は哲学部に包摂されていることから、ここでは敢えて便宜上それらを哲学部から独立させ理学部（自然科学部）に数え入れている[87]。

図 3、ヴァイマール期日本人正規学籍登録者の登録専攻比率

が次第に注目され、東京や京都の大学では現象学の講義や演習が始まっていた。しかしそれまで私の通っていた神戸高商（いまの神戸大学の前身）あたりでは、経済学方法論との連関で、まだ新カント派、とくに西南ドイツ派の思想が全盛であった。私もそうした風潮のなかで経済学から次第に哲学に関心をもつようになり、ヴィンデルバントやリッケルト、さらにはカントの書物をよむようになった。」（山本 1973: 2）。

[81] フュルト生。哲学者。ミュンヒェン大学やエアランゲン大学等で哲学を学び、1924 年にハイデルベルク大学にてリッカートのもとで教授資格を取得、以後 1933 年まで教鞭を採る。1933 年よりその著書の思想がナチス思想に適合的との理由からギーセン大学に招聘された。ヘーゲル全集の編纂でも知られるとおり最も重要な新ヘーゲル主義の哲学者として著名である。ただしもともとの人的な系列としてはリッカートに学んだように、新カント派の圏内から出た学者と言える。Vgl. Glockner 1969. Vgl. auch Drüll-Zmmermann 1986: 84f.

[82] Glockner 1969: 225f. Gülberg 1997: 41f.

[83] このイェリネックからトーマおよびアンシュッツへというハイデルベルク公法学の伝統は、哲学における新カント派とともに近代日本の学知、とりわけ立憲主義的な公法学理論の発展に多大な影響を有していた。事実、美濃部達吉（Minobe Tatsukichi）も佐々木惣一（Sasaki Sōichi）も当地に学んでいる。よって本来、近代日本の学知形成に対する当大学の影響を考える以上、こうした公法学を中心とする帝政期からヴァイマール期にかけての法学部の役割も無視することはできない（Vgl. Laufs/Ackermann 1994. Ulmer (Hg.) 1998.）。

[84] ヴィルヘルムスハーフェン生。哲学者。キール大学にて哲学とドイツ学を修学後、第一次世界大戦を経て 1919 年よりハイデルベルク大学でリッカートに学ぶ。1920 年代初頭、日本人留学生の大峡秀栄（Ōhazama Shūei）と共編でドイツ語で初めての禅論集を刊行した。のちナチスに入党し、ベーメを研究。1945 年自死。

[85] 務台 2000 [1964]: 290。

[86] ただし学生によっては当然数年にわたって修学をつづける者もおり、その際に、ゼメスターによって修学専攻を変える場合がある。ここではその場合、当該人物は両方の専攻に算入している。ここで示された数値が実際の留学生総数である 92 名を上回っているのはこのためである。

[87] 1890 年まで哲学部に編成されている自然科学系諸講座への登録学生をそれと見分け、便宜上、理学部（自然科学部）に分類するため、ここでは登録の年代およびハイデルベルク大学以外のドイツ他大学での登録専攻（Vgl. Hartmann 2005）、そして後年職業の属性を判断材料とした。

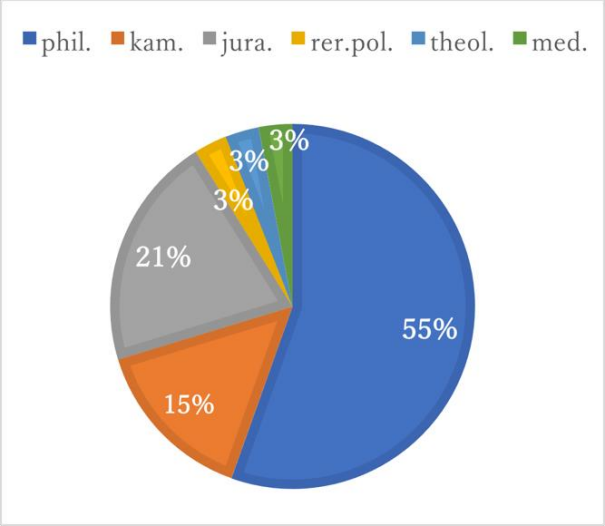
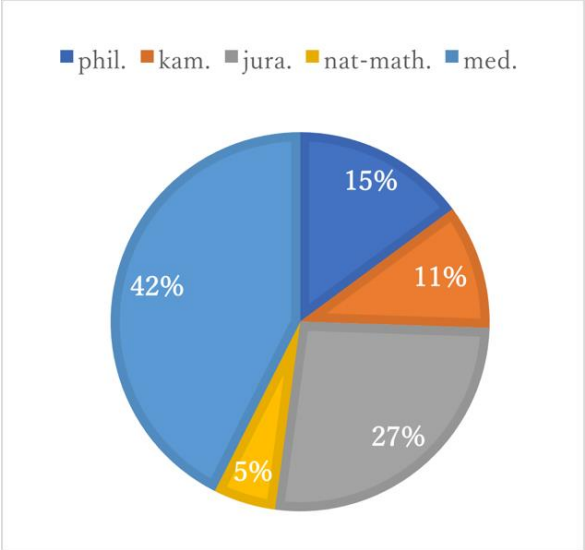


図 4、帝政期日本人正規学籍登録者の登録専攻比率
（HARTMANN 2005 に基づいて久野作成）



一見してここからは、帝政期にはヴァイマール期に比して理科系学科への登録比率がかなり高いことがわかる。すなわち、大戦以前においては医学（med.）と数学・自然科学（nat-math.）の修学生が合わせて 47%と全体の半数近くを占めていたのに対し、哲学（phil.）は未だ 15%に留まっていた。それに対して大戦後では両者の割合がほぼ反転し、経済学を含む哲学部の割合が 55%と半数を超えている。さらに、これに法学（jura.）や官房学（kam.）、政治学（rer.pol.）などその他社会科学系専攻の登録者数を加えれば、その合計は全体のおよそ 9 割以上を占めることになる。逆に医学はわずか 3%、数学・自然科学は 0%にまで落ち込んでいる。このような需要の変化からも、大正から昭和初期日本においては、いかに人文・社会科学分野の発展が目覚しかったかを垣間見ることができよう。そしてなかでも、たとえば当地に学んだ全文部省在外研究員 30 名における哲学者と社会科学者の割合比が 9:13 となっていることからも推察できるごとく、斯学派の社会科学に対する影響が哲

学でのそれに決して劣らぬものであったということはやはり注目に価する事実である[88]。これまでは主として哲学領野との関係が焦点化され、 ザイフェルトら一部の論者による指摘[89]を除いては社会科学方面への影響はそれ自体として主題的に考察されることはほとんどなかったが、しかし見てのとおり、近代日本の学知形成を総体として考える以上、新カント派と日本の社会科学との密接な関係は決して看過することのできない重要な論点と言わなければならない[90]。

さて、それでは以上のような事実と傾向をふまえたとき、ヴァイマール期ハイデルベルク大学への留学体験の意味とは、近代日本の学知形成にとってどのようなところにあったと見るべきなのであろうか。以下では最後に、新カント派の影響に対する従来的評価にまで若干配視しつつ、これまで見てきたところを簡潔に整理、もってその意義をあらためて確認しておくこととする。

4.2 ヴァイマール期留学の歴史的意義

これまで縦覧してきた統計や証言からも明らかなように、1920 年代を中心としたヴァイマール期には、リッカートをはじめとする新カント派理論の習得を求めて多数の日本人留学生がここハイデルベルク大学に学び、その後の日本の学知形成・発展に寄与したと考えられる。その点では、明治末から昭和初期における日本の学問や思想文化の歩みとは、ベルリンとならび、まさにここハイデルベルクとともにあったと言っても過言ではないであろう。

だがそれにもかかわらず、これまでの理解では意外にも、それが有した重要性についてはほとんど省みられることがなかった。当大学との交流に関するまとまった研究がまったく存在していないことはそのなによりの証左であろう。そしてその理由は何と言っても、よく知られるとおり当の新カント派が 20 年代になるとまもなく、ドイツ本国でも、そして日本でもにわかに衰退し時代をリードする力を失っていったという事情にあったと思われる。したがって従来の哲学史においても、新カント派は 1910 年代を中心に爆発的流行をみせるものの、やがては現象学や実存哲学、論理実証主義、哲学的人間学、あるいはマルクス主義などといった次世代思想によって乗り越えられてゆく過渡的思潮として描かれることが多かった。そしてそれはたしかに、当時留学した若き哲学徒たちの証言や動向に鑑みる限り間違いというわけではない[91]。しかしながら、たとえそれが事実である

[88] 文部省在外研究員 30 名に限って見た専攻分野の比率はそれぞれ、神学:2 哲学:9 その他人文科学:6（文学: 5・歴史学: 1） 社会科学: 13（経済学: 9 法学: 4 ）である。なお、ヴァイマール期ハイデルベルク大学における人文・社会科学分野への傾斜は同時期のベルリン大学と比しても強い （Vgl. Hartmann 2003）。

[89] Seifert 2012: 308. Derselbe 2013: 11f. また、広川 2006: 61、芝崎 2009: 68-69、大橋 2017: 131 など。

[90] ちなみに、近代日本における社会科学の発展を見る場合、当然ながら新カント派とも密接な影響関係にあったマックス・ヴェーバー、あるいはその実弟アルフレート・ヴェーバーやカール・マンハイムら社会・国家学研究所の学者たちの存在を無視することはできない。そのため、当大学の近代日本社会科学への影響を考察するにあたっては、実際には新カント派の方法論的影響だけでなく、先にも触れたドイツ公法学の伝統とともに、こうした社会・経済学者との交流全体までを視野に入れて勘案する必要がある（Vgl. Blomert 1994. Ulmer (Hg.) 1998.）。

[91] その原因として、大橋容一郎は当時ドイツにおける人的資源の転換や昭和期日本における天皇制ファシズムの抬頭といった歴史的事情の存在を鋭く指摘している（大橋 2017: 140–145、 同 2008: 22–26）。しかし同時に、三木や羽仁らの事例を見る限り、彼らの主体的な問題意識によるところもかなり大きかったに相違ない。羽仁の場合、当時日本を含め世界が新たに動きつつあることを強く感ずるなか、自らの生き方と時代への応答の仕方に疑問を持ち、その答えを索めてリッカートを目指していた。そして当地にて相当の研究をおこなったうえで、結果として時代を批判する力を持たないリッカートに見切りをつけたのである（羽仁 1950: 2、同 1966: 137–138）。同じく三木にしても単に新カント派の理論研究のために渡独したのではなく、その背後には歴史に対する彼独自の問題意識がひかえており、それは日本の思想的発展を阻害する歴史的要因としての天皇制の問題とも深く触れ合っていた。彼が当地を去るにあたりリッカートに捧げた論説はそうした背景

としても、この一事をもってすぐさま当地との学術交流が日本の学知形成やその後の展開・変容に対して意味僅少になったと臆断することはいささか早計であろう。なぜなら近代日本において新カント派が果たした役割とはそれほどに単純なものではなかったはずだからである。

と言うのも、まずそもそもの問題として、従来新カント派は後続思想によって乗り越えられたという側面が強調される傾向が強かったが、専門的な哲学界に限らない、より広い近代日本の思想史的文脈で考えた場合、ただちにそう言い切ってしまえるかは疑問と言わざるをえない。なるほど、たしかに 20 年代後半以降、哲学界においてはドイツ本国同様、日本でも新カント派は往年の勢いを失ってゆく。しかしこと日本に関する限り、新カント派は思想としても、これと密接なつながりを有する文化主義や人格主義、教養主義などといった独自の文化思潮に変奏されつつ、その後も知識層の思想的基底に受け継がれていたのではなかったか[92]。紙幅の関係上ここではこの点については論ずることができなかったが、しかしこのようにアカデミーや哲学界の外にまで視圏を拡げるならば、松沢弘陽の言う「文化自由主義」の問題までも含め[93]、新カント派の影響力とはより広範囲かつ長期に及んでいたと考えるほうが妥当的であろう[94]。しかも、文化主義者あるいは「大正教養派」などと言われて如上の文化を牽引した人びとの多くは、第一次大戦前後においてそれぞれハイデルベルク大学への留学を経験した者たちであったのである。

そして、なによりここで強調しておきたい点は、これまでも述べてきたとおり、新カント派が学問上の方法論として、近代日本の社会科学の成立と発展に対しても強い衝撃を与えていたという事実である。当時ドイツにおいて資本主義の発達と自然科学パラダイムの隆盛、そして大学の構造変革といった背景が西南学派をして社会科学独立の機運を牽引せしめたように、1920 年代の日本でも「社会の発見」の自覚を通じて社会思想や社会科学への注目が高まっていた。「往昔の青年が時とすると殉教者のやうな態度で文学に就いたやうに、現今の才能ある青年は社会科学の研究に走るやうになつた。」と木下杢太郎（Kinoshita Mokutarō, 1885–1945）[95]をして語らしめたのは 1927 年の

をひそかに物語っている（三木 1966a [1923]）。こうした問題意識と時代へのアンガージュマンが彼らをして純粋な規範主義や先験的論理主義の立場に留め置くことを許さなかったことは十分に理解できる事態である。

[92] たとえば 1920 年代を回顧する座談会で生松敬三は次のように述べている。「旧制高等学校の教養主義というものはぼくらまで、戦争中までずっとつづいてきているわけで、そうすると必読書は朝永三十郎であり阿部次郎の『三太郎の日記』であり何でありというような、まずほんとうに新カント派的な人格主義、教養主義、理想主義みたいなものが主流としてきている」。同じく荒川幾男も、「マルクス主義者の大部分は知識人としてみればみんなやはり教養主義、文化主義で育った人たちで、そういう意味では教養主義はずっとこんどの大戦の前まで続いたと言えます」と述べている（荒川他 1981: 30–31）。ただし、ドイツ本国における文化哲学や文化科学と、日本で展開した実践的な文化主義や、あるいは内省的な教養主義とはただちに同一のものではない。したがって両者の連続と断絶を含めた関係性については今後、個別的事象に即して詳しく解明してゆく必要がある（この点についてはさしあたり大橋 2018b、大木 2017、同 2019 などを参照のこと）。

[93] 松沢弘陽によれば、新カント派の影響下、大正期日本に展開したこの文化主義や人格主義が、いわゆる「文化自由主義」と称される思潮となって近代日本における自由主義思想の生成に対しても一定の役割を果たしたという（松沢 1994: 249–250）。それは換言するならば、近代日本における自由主義がその思想的水源としてイギリスやフランスとともに、ドイツの理想主義を有していたということでもある。とするならば、新カント派の受容や克服のあり方を思想史的に検証することは、戦前日本における自由主義の性格とその問題性を歴史的に見定めるためにも重要な意味を持ってくると言えるであろう。

[94] なお、仮に新カント派が以後乗り越えられたという枠組みを認めるとしても、斯学派が後続思想の展開にあたって大きな礎石の役割を果たしていたことは看過すべきでない。たとえば石田雄も指摘しているとおり、まさに「新カント派はマルクス主義の弁証法的前提であった」（石田 1984: 100）。そしてその際、生松敬三が三木の留学について、「ハイデルベルクへの留学は、新カント派からの脱却のためにこそ必要な一階梯であった」と述べているように、ヴァイマール期ハイデルベルク大学への留学体験とは、新たな思想的立場へと移行するための転機ないし跳躍台としても重要な意味を持っていたといえよう（生松 1980: 226）。

[95] 静岡生。詩人、劇作家、医師。東大入学後、「パンの会」を立ち上げて多くの文学者とともに文芸活動に従事。1921 年よりフランス留学を経て 1926 年、東北大教授となる。皮膚科の医師として活動する一方、自ら多くの文学作品を発表するとともに、森鷗外研究についても大きな足跡を遺した。

ことである[96]。そのため、杏村や三木が同時代人として的確に評価していたとおり、左右田の試み以降、多くの社会科学者が挙ってリッカートにその方法論的基礎を索めるという風潮が発生したのであった。つまりは、ドイツとは多少背景を異にしつつも、しかし類似した問題関心と要請とを持つことにより、日本の社会科学界でも、文化科学的概念構成の方法論を導入することで自然科学からの差異化と諸学の自律的発展の達成を目指すという、いわば学知の連鎖反応が起こっていたのである。かかる事情こそが表 2 でも見たように多数の社会科学者をして当時期ハイデルベルク大学へと赴かしめることになるのであるが、それは別様に表現するならば、当地留学によって多くの社会科学者たちが、まさにドイツ本国における社会科学独立の機運と現場を直に目撃し体験することを意味していたとも言えるであろう。これは大戦後ドイツの社会状勢や社会運動の目撃と併せて、大正期以後の日本の社会科学発展にとり、重要な知的経験であったに相違ない。

しかもこの点で留目すべきことは、この社会科学領野においては、その影響がより持続的であったとも考えられることである。たとえば 20 年代前半のハイデルベルク大学に政治・経済学を学んだ法哲学者の恒藤恭（Tsunetō Kyō, 1888–1967）の場合、たしかに彼は当地留学期にはカール・ヤスパース（Karl Jaspers, 1883–1969）らの講義に惹かれ[97]、以後、従来定位した新カント派からは雁行的な後退をみせるようになる[98]。しかしその後も新カント派的な価値理念を重視するなど、その思考様式を最後まで完全に手放すことはなかった[99]。そればかりか蠟山政道（Rōyama Masamichi, 1895–1980）[100]に言わせれば、近代日本における経験科学としての政治学の成立と国家学からの自律に対して「特大大書に値する」多大な貢献をなしたのもまた恒藤の研究業績であったのである[101]。同様、ヴァイマール期終盤の当大学にて、新カント派的方法論に基づく法理論を講じていたグスタフ・ラートブルフ（Gustav Radbruch, 1878–1949）に師事した常盤敏太（Tokiwa Toshita, 1899–1978）は、その後もラートブルフを終生師と仰いで日本に紹介するとともに、自ら民法や刑法、あるいは法哲学や経済法の分野にまでわたって足跡を遺した[102]。そしてさらに言うならば、たとえこのようなハイデルベルクへの直接の留学経験は持たなかった場合であっても、たとえばヴェーバー兄弟やラートブルフ、ゲオルク・ジンメル（Georg Simmel, 1858–1918）、またはマックス・エアンスト・マイヤー（Max Ernst Mayer, 1875–1923）あるいはハンス・ケルゼン（Hans Kelsen, 1881–1973）などといった、リッカートと西南学派の方法論的影響圏にあった社会科学者の学説にその後多くの日本人が取り組んだことを思うならば、社会科学の方面においては、新カント派の理論的影響とは、その後のマルクス主義の全盛等を経ながらもなお一定程度残存しつづけたと見做すことは可能ではなかろうか。少なくとも、飯田が指摘するように日本の社会科学者たちが「社会の発見」を理論的に自覚し始めたのがむしろ第一次世界大戦後の 1920 年ないしは 21 年ころからであるとするならば[103]、その受容と展開の時期およびあり方は、従来言われてきた哲学領野におけるそれとはまたやや異なる位相にあったと見なければならないであろう。そして敢えて繰り返せば、当時ここハイデルベルク大学は新カント派最大の中心地の一角と見做されていたのである。これまで哲学領野での影響と比べ

[96] 木下 1982 [1927]: 142。
[97] 恒藤 1952: 75、同 1955: 224、同 2013。
[98] 久野 2013、同 2018。
[99] 加藤 1969: 486。笹倉 2018: 18。
[100] 新潟生。政治学者。東大卒業後、イギリス留学ののち 1928 年より東大教授。戦時中は近衛内閣のブレーンとして東亜協同体の建設に参画。戦後は公職追放を経て、お茶の水大学学長や憲法調査会委員、国際基督教大学教授等を歴任した。
[101] 蠟山 1949: 149–152。なお、蠟山自身も新カント派には多大な影響を受けており、1925 年の『政治学の任務と対象』ではリッカートの方法論に基づいた政治学の概念構成を試みている。
[102] 団体法研究所編 1976。
[103] 飯田 1977: 206。

て強調されることの少なかった事実ではあるが、しかし実はこの点にこそ、近代日本の学知形成とその航跡にとって、ヴァイマール期ハイデルベルク大学との学術交流が有したもうひとつの大きな歴史的意義もあったといえよう。

5 結びにかえて

さて、以上小稿では主として学籍登録状況の分析を通じ、ヴァイマール期ハイデルベルク大学への留学状況とその背景について詳しく通覧してきた。これにより、従来ザイフェルトによる指摘以上のことは不明であった当時期留学をめぐる事実関係についてはほぼ明らかになったことと念う。そして明治末から大正期以後の近代日本における学術振興や思想形成に対して当大学が大きな役割を果たしたとされる以上、こうした基礎的事実の具体的解明と整理はそのまま、近代日本の学知形成過程とその性格をより多面的かつ総合的に理解するための重要な前梯をも供与するであろう。

見てきたとおり、当時期のハイデルベルク大学には、国内外の政治・社会状勢、あるいはまた青年知識層への『アルト・ハイデルベルク』の浸透などの諸条件にも後押しをされる形で、多くの「若い教授」をはじめとする日本人留学生が一挙に押し寄せていた。なかでも当時最大の引力となっていたものは、当地を拠点とする西南ドイツ学派の存在であったが、しかもその影響とは決して狭く哲学界に限られたものではなく、思想界全般や教育学あるいはときに文学[104]までも含めたより広範囲に及ぶものであった。そしてそれはとりわけ社会科学の発展に対しては、哲学領野にも劣らない強い影響力を及ぼしていたのである。当時期ハイデルベルク留学における社会科学者の割合の高さはこうした事実を数値的にも裏づけているといえよう。加えて、かかる留学生たちのなかには、その後第二次世界大戦中から戦後までを含め、日本の社会科学界を牽引してゆくこととなる者の姿も多く見出すことができる。この意味ではザイフェルトも指摘するように、ハイデルベルク大学（新カント派）とはまさしく彼ら日本人知識人たちの学問的な出発点あるいは修行時代として重要な位置を占めていたと言うべく[105]、したがって当時期、当大学との学術交流が近代日本の学知形成に対して有した独自の思想史的意義と衝撃はきわめて大きかったと言わなければならないであろう。

しかるに、従来の研究では、かつて広川禎秀が「日本のアカデミズム哲学の新カント派に関する研究はあるが、社会科学全体への新カント派の影響については研究が進んでいない」[106]と指摘したように、こうした社会科学と西南学派を含む新カント派全体との関係についてはほとんど本格的な考究がなされてこなかった[107]。よって今後は、社会科学領野との関係をもひとつの柱に据えたより幅広い文脈のなかでこそ、新カント派と近代日本の関係を把えなおす必要があるであろう。そしてその際、ハイデルベルク学知との接触がひとつの重要な役割を担っていた以上、当大学との学術交流の実態と影響を精細に解明しておくことは、両者の関係を考覈するうえでも不可欠の作業と位置づけられるはずである。そのため小稿ではまずもってその事実的事象を明らかにして整理をおこなったわけであるが、今後はこれを受け、聴講生も含めた留学生たちの知的体験の思想史的検討を通じた、より動態的かつ総合的な解明がなされる必要があろう。ついては最後にこのための大まかな課題の提起をおこないつつ、稿を閉じることとしたい。

まず、第一に、留学生たちの思想体験を歴史的に検討する場合、当然のことながら、彼らが当時直面していた社会状況や思想情況、そしてドイツ側の学問事情との主体的関わりに積極的に配視

[104] たとえば西南学派の「価値哲学」は哲学や教育学あるいは社会科学に限らず、文学の方面にまで及んでいた（位田 2014、同 2015）。
[105] Seifert 2013: 7.
[106] 広川 2006: 61。
[107] ただし、ごく最近になって、伊藤貴雄を中心とする研究グループにより、これと類似した問題意識に基づく研究が開始されつつある（伊藤他 2021）。このため今後はその研究成果も俟たれるところである。

する必要がある。とりわけここハイデルベルクでは、「ハイデルベルク精神（Heidelberger Geist）」[108]などと称される従来の知的伝統をふまえた、当地独特の精神的雰囲気やそれに伴った学知が形成されていた[109]。しかもこの時期は絮語するまでもなく、ナチズムの抬頭も含め激動する政治的、社会的不安の時期にあたっており、当地でもエミール・グンベル（Emil Gumbel, 1891–1966）[110]の地位をめぐるグンベル事件等によって大学全体が揺れつつある状況であった[111]。三木清の証言にもあるように[112]、多くの日本人留学生たちもまた当時期のドイツに学んでいた以上、多かれ少なかれこうした時代の雰囲気や精神情況に触れ、刺戟を受けていたことは間違いないであろう。したがって彼らがどのような問題意識のもと、いかなる学知や知的クライスと接触し、またその過程でどのようにかかるドイツ社会や学知の情況と日本側のそれとのずれや時差を体験したのか、そのプロセスを両国の思想的ダイナミズムのなかで検証することは必須の課題となるはずである。この検証は結果的に双方の学知の異同や連鎖関係それ自体を具体的に見定めることにもつながるであろう。

また第二に、かかる西洋社会や学知との出会いのみならず、現地での日本人同士の交流にも目配りをしておく必要がある。留学においてはときに同国人同士の密接な交流こそが学問的交響を奏でるという場合がありうるからである[113]。実際、当時ハイデルベルクでも日本人留学生の間には広いネットワークが存在していた。その例を彼らの現地での住居にとれば、VdS を通覧する限り、日本人が一旦居住した下宿先には、その後も代々日本人が下宿するという場合が数多く見受けられる。戦後インフレによって大きな経済的打撃を受けたドイツ中産階級、なかでも特に未亡人の家庭は生活を支えるために多くの日本人を受け入れており[114]、そうした下宿を日本人たちが留学生間のネットワークを使って受け継いでいったものと考えられる。たとえば阿部次郎がその家族との美しい交流を描いて知られる「山腹の家」シュヴァルツ家にしても、それはもとは石原謙の下宿先であったし[115]、逆に阿部の後には立澤剛（Tatsuzawa Tsuyoshi, 1888–1946）や安部能成（Abe Yoshishige, 1883–1966）らが居住している[116]。これは留学生同士の交流やネットワークが強く存在したことを物語るひとつの証拠といえよう。そして事実、日記や書簡、回想録など彼らの記録を繙けば、そこには彼らが現地で専門や年齢の差を超えて日常的にも学術的にも大変濃密な交流をおこなっていた様子を容易に確認することができる。ヘリゲルやグロックナーを囲んでの研究会はその代表であろうが、こうした日本人同士の交流が有した意味は、たとえば羽仁五郎にとってリッカートの演習よりも糸井靖之や大内兵衛、三木清らとの日々の議論こそが有意義であったことや[117]、あるいは清宮四郎が一時期、憲法学の哲学的研究を志向したことに高橋里美や務台理作との交流が手伝っていた事例[118]等に徴しても、その学問的遍歴にとっては無視しえない。

---

108 ラートブルフ（山田訳）1962: 81–82。

109 Vgl. Hepp 1994. Doerr (Hg.) 1985. Buselmeier. *et al.* (Hg.) 1985. Fix 1994. Ulmer (Hg.) 1998. Bitterolf *et. al.* (Hg.) 2014. usw.

110 ミュンヒェン生。統計学者。ミュンヒェン大学を卒業後、1923 年の教授資格取得から 1932 年までハイデルベルク大学にて教鞭を採るもナチスのユダヤ人迫害により大学を追われる。その後フランスのリヨン、戦後はアメリカのスタンフォードやコロンビア大学等の教壇に立ち極値理論の開拓に貢献した。第一次大戦を痛烈に批判した平和主義者としても知られる。Vgl. Drüll-Zmmermann 1986: 95. Vgl. auch Wolgast *et. al.* (Hg.) 1993.

111 Vgl. Wolgast *et. al.* (Hg.) 1993. また、杉浦 1996、マン（林部他訳）1993 [1986]: 101–137 も参照。

112 三木 1966b [1942]: 424。

113 石川 2016: 229–235。

114 北昤吉（Kita Reikichi）の証言によれば、「当時ハイデルベルヒに於ては、外国人の室を求める者には、生活困難なる寡婦の家が優先権を認められてゐた」という（北 1925: 304）。実際、留学生たちの下宿先住所を通覧しても、何某夫人宅と誌されている場合が多い。なお、留学を通じた北の哲学研究の推移に関しては、大庭大輝「北昤吉の哲学研究-ベルクソンと新カント派をめぐって-」『史境』2017 年 3 月がある。

115 石原 1961: 69。

116 安倍 1944 [1934]、同 1966 [1965]: 541。

117 大内 1996: 1–3。

118 清宮 1979: 94。

そして最後に、当地との関係を学術交流とその影響として検討する場合、単に留学という一方的なベクトルのみならず、ドイツから日本へという逆のベクトルをも視野に入れる必要があろう。というのも、当地に留学した日本人との交流を介して、その後当地の学者が渡日して教鞭をとり、両国の学問文化振興に寄与するという例がいくつか見受けられるからである。東北帝大の教壇に立ちつつ弓や禅の体験を通じて日独哲学交流に貢献したヘリゲルや[119]、東京・京都両帝大の草創期経済学部で教鞭をふるうことで日本の経済学界のみならず自らの日本研究をも進展させたレーデラー[120]、あるいは旧制高校や戦後の東大などで教鞭をとりつつドイツ語の辞書を編纂し、日本におけるドイツ語教育の促進と普及に貢献したロベルト・シンチンガー（Robert Schinzinger, 1898–1988）[121]などはその代表例といえよう。そのため、このような 渡日学者の動向についても詳しく検討し明らかにしておくことは、学術交流としての全体像とその相互影響を考える場合重要となるはずである。

とまれ、これらの課題についてはあらためて他日を期し、ここではいわばその前梯となるべきヴァイマール期留学に関する事実的解明とその意義づけをもって、ひとまず筆をおくこととしたい。

表 2、ヴァイマール期ハイデルベルク大学の日本人正規学籍登録者一覧 *

登録氏名(留学時年齢), 生没年, 出身地
登録学期, 登録専攻（主専攻／副専攻）／その他登録専攻、 初回登録現地住所、 留学時身分もしくは留学直前の動向、 後年職業・身分、 備考（主要補足参考資料）

【A】

ABE Yoshinari, 安倍 能成 (42), 1883–1966, 愛媛県松山 = ABE Yoshishige
SS1925–WS1925/26, 哲学, Schloss-Wolfsbrunnenweg 12.(b/Frau Schwarz), 法政大学予科教授, 哲学者・京城帝国大学教授、文部大臣他 (助川徳是「安倍能成年譜」『香椎潟』1968 年 8 月)

ABE Zirō, 阿部 次郎 (39), 1883–1959, 山形県 (= 現表記では ABE Jirō)
WS1922/23, 哲学(哲学/文学), Schloss-Wolfsbrunnenweg 12.(b/Frau Schwarz), 慶應義塾大学嘱託講師, 美学者・東北帝国大学教授他 (『阿部次郎全集』17、1966 年)

AKAMATSU Kaname, 赤松 要 (29), 1896–1974, 福岡県久留米
SS1925–SS1926, 哲学, Handsch'h.Ldstr.35.(b/Frau Mann), 名古屋高等商業学校教授, 経済学者・東京商科大学教授他 (小島清編『学問遍歴』1975 年)

AMAKAWA Tamotsu, 天川 保 (32), 1891–1925, 兵庫県姫路
WS1922/23–SS1923, 医学, Scheffelstr.3.(b/Frau Dr. Schattländer), 岡山医学専門学校卒業後に留学, 医師・明石海浜病院院長 (『岡山医学会雑誌』1925 年 10 月)

AMANO Teisuke, 天野 貞祐 (39), 1884–1980, 神奈川県 = AMANO Teiyū
WS1923/24–SS1924, 哲学, Wredeplatz 4 II.(b/Frau Dr. Vogtherr), 学習院教授, 哲学者・京都帝国大学教授、文部大臣他 (独協学園百年史編纂室編『回想 天野貞祐』1986 年)

AOYAMA Enbin, 青山 延敏 (39), 1888–1974, 千葉県 = AOYAMA Nobutoshi = AOYAMA Kōtei, 青山 郊汀
SS1927, 哲学(文学/文献学), Neuenh.Ldstr.52.(b/Frau Voss), 北海道帝国大学予科教授, 独語学者・北海道帝国大学予科教授 (『文化人名録』1978 年版)

ARASAWA Yūtarō, 荒澤 雄太郎 (28), 1895–1962, 北海道西島牧 = TSUBAKI Yūtarō, 椿 雄太郎

[119] Vgl. Gülberg 1997. Derselbe 1998. 山田 2005。
[120] Seifert 2011: 308. Derselbe 2013: 12f. Schwentker 1991. シュヴェントカー（野口他訳）2013: 74–80。
[121] フライブルク生。ドイツ文学・哲学者、ドイツ語教師。ベルリンやマールブルク、ハイデルベルク大学等で哲学および文学を修めたのち、1923 年に渡日。旧制大阪高等学校、東北帝大等で教鞭を採り、戦後は学習院や東大で専任を務めた。日本の哲学や文学を翻訳を通じてドイツに紹介するとともに、ドイツ語辞書の編纂をはじめ、日本におけるドイツ語教育に大きな足跡を遺した（寺脇 1986: 139–177）。

WS1923/24, 哲学, Handsch.h.Ldstr.60.(b/Frau Kirsch), 国学院大学派遣留学生, 歴史哲学者・宮城学院女子大学教授 (益井邦夫「大学昇格後初の留学生荒澤(椿)雄太郎氏」『校史』2016 年)

【F】

FUJITA Keizō, 藤田 敬三 (28), 1894–1985, 香川県

WS1922/23–WS1923/24, 官房学(国民経済学), Kronprinzenstr.17.(b/Frau Derichsweiler.), 京都帝国大学副手, 経済学者・大阪商科大学教授他 (『大阪経大論集』1986 年 11 月)

FURUKAWA Jiryō, 古川 慈良 (31), 1900–?, 神奈川県横浜

WS1931/32‑SS1933・SS1934・SS1935-WS1935/36, 哲学(印度学/哲学), Schloss-Wolfsbrunnenweg12-14., 大正大学・東洋大学講師, 仏教学者・大正大学講師他, WS1930/31–SS1931 は聴講生として登録(Jiryo FURUKAWA: Samurai und Bodhisattva. Tokyo 1933 /『新亜細亜』1942 年 6 月)

【G】

GOTŌ Tomio, 後藤 富夫 (23), 1899–?, 東京

SS1922–WS1922/23, 哲学, Anlage 15., 東京帝国大学学生, 不詳 (『三木清著作集』2、1949 年)

【H】

HANATO Ryōzō, 花戸 龍蔵 (31), 1881–?, 広島県尾道

WS1922/23, 官房学(国家学), Uferstr.16.(b/Frau Krauss), 神戸高等商業学校教授, 財政学者・神戸商業大学教授他 (花戸龍蔵博士古稀記念論集刊行会『財政学の課題』1962 年)

HARA Kumakichi, 原 熊吉 (38), 1885–?, 東京

SS1923, 法学(法学/官房学), Alb.Maysstr.9., 不詳, 運送計算所社長、明治大学講師, 戸籍は新潟 (『人事興信録』1937 年版)

HIRATA Norio, 平田 憲夫 (44), 1879–?, 和歌山県

SS1923/24–WS1924/25, 法学および官房学, Unt.Neckarstr.36.(b/Dr. Rech), 名古屋高等商業学校教授, 林業経済学者・京都帝国大学教授他 (日本林業技術協会編『林業経済研究』1961 年)

【I】

ICHIJIMA Chōmatsu, 市島 長松 (24), 1901–?, 新潟県

WS1925/26–SS1926, 哲学, Mönchhofplatz 1., 不詳, 市島酒造四代目経営者 (『産経日本紳士年鑑』1969 年版)

IKEDA Kiyoshi, 池田 潔 (26), 1903–1990, 東京

SS1929–WS1929/30, 哲学(独語), Leopoldstr.55., ケンブリッジ大学を経て留学, 英文学者・慶応義塾大学教授他, 1920 年に麻生中学を中途退学して渡英 (『日本人名大辞典』2001 年)

INOUE Kakutarō, 井上 角太郎 (30), 1900–1967, 北海道余市

WS1930/31–SS1931, 官房学, Bergstr.53., 京都帝国大学卒業後、東洋経済新聞社勤務後に留学, ジャーナリスト・朝日新聞ニューヨーク通信員,「ベルリン反帝グループ」メンバー (加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人』2008 年)

ISHIWARA Ken, 石原 謙 (39), 1882–1976, 東京 = ISHIHARA Ken

WS1921/22–SS1922, 神学, Bergstr.29., 東京帝国大学助教授, 神学者・東北帝国大学教授他, 1973 年ハイデルベルク大学名誉神学博士(『中世思想研究』1976 年 2 月)

ISOZAKI Tatsugorō, 磯崎 辰五郎 (27), 1898–1990, 香川県三豊

WS1925/26, 法学, Schillerstr.5.(b/Frau Dr. Ohler), 京都帝国大学卒業後に立命館大学派遣留学生として留学, 憲法/行政法学者・立命館大学教授他 (『甲南法学』1968 年 11 月)

ITOI Yasuyuki, 糸井 靖之 (29), 1893–1924, 東京

WS1922/23–WS1923/24, 官房学/哲学, Mönchhofplatz 1.(b/Frau Kraemer.), 東京帝国大学助教授, 統計学者・東京帝国大学助教授, 1924 年にハイデルベルクにて客死 (大内兵衛「彼のこと」『経友』1924 年 12 月)

ITOWI Seigo (24), 1900–?, 京都 (= 現表記では ITOI Seigo)
SS1924–SS1925, 法学, Mönchhofplatz 1.(b/Frau Kraemer.), 東京帝国大学学生, 不詳 (SA)

IWASAKI Tsutomu, 岩崎 勉 (23), 1900-1975, 和歌山県広村
WS1923/24–SS1926, 哲学, Kaiserstr.12.(b/Frl. Klara Betz), 早稲田大学卒業後に留学, 哲学者・早稲田大学教授 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

【K】

KAKU Kurazō (26), 1900–?, 韓国
WS1926/27, 哲学(哲学/神学), Klingenteich 15b.(b/Frau A.Hahn), ハーヴァード大学を経て留学, 留学前は京都聾唖学校非常勤講師, 不詳 (SA)

KANDA Tateo, 神田 盾夫 (32), 1897–1986, 東京
WS1929/30, 神学, Hirschgasse 20.(b/Dr. Föhrenbach), 京都帝国大学学生、京都女子高等専門学校講師、オックスフォード大学クライスト・チャーチを経て留学, 神学者・東京帝国大学教授他 (『神田盾夫著作集』5、1981 年)

KITA Reikichi, 北 昤吉 (36), 1885–1961, 東京 = KITA Ōko, 北 鴨湖
SS1921–SS1922, 哲学, Kronprinzenstr.17., 早稲田大学講師, 哲学者・大東文化学院講師、民政党議員他, 本来の出身は新潟県両津 (大庭大輝「北昤吉の哲学研究」『史境』2017 年 3 月)

KITAYAMA Jun'yū, 北山 淳友 (25), 1902–1962, 静岡県
SS1927–SS1929, 哲学, Fr.Ebertstr.14a., 浄土宗派遣留学生, 日本語教師・ベルリン大学日本研究所副主事他, 1930 年ハイデルベルク大学で博士号取得 (小川誉子美「日本語講師北山淳友の事績」『日本学刊』2011 年)

KIYOMIYA Shirō, 清宮 四郎 (27), 1898–1989, 埼玉県浦和
WS1925/26, 法学, Bergstr.10.(b/Richter), 京城帝国大学予科嘱託講師、朝鮮総督府派遣留学生, 憲法学者・京城帝国大学教授他 (清宮博士退職記念論文集刊行委員会編『憲法の諸問題』1963 年)

KOKUSHŌ Iwao, 黒正 巖 (28), 1895–1949, 岡山
WS1923/24–WS1924/25, 哲学(国民経済学), Schillerstr.5Ⅲ.(b/Dr.Ohler), 京都帝国大学講師, 経済史学者・京都帝国大学教授他 (徳永光俊他編『社会経済史学の誕生と黒正巖』2001 年)

KOMAKI Takeo, 小牧 健夫 (39), 1882–1960, 東京 = KOMAKI Bochō, 小牧 暮潮
WS1922/23, 哲学, Bergstr.76a.(b/Dr.Kraumann), 水戸高等学校教授, 独文学者・九州帝国大学教授他 (菅藤高徳他編『ゲーテとその時代』1959 年)

KUBO Masaru, 久保 勉 (44), 1883–1972, 愛媛県群中村
WS1927/28–SS1928, 哲学, Häusserstr.34., 留学前は東京帝国大学にてラファエル・フォン・ケーベルの助手, 哲学者・東北帝国大学教授他 (『白山哲学』1973 年 7 月)

KUKI Shūzō, 九鬼 周造 (34), 1888–1941, 東京
WS1922/23–SS1923, 哲学, Grand Hotel Heidelberger Hof., 文部省嘱託, 哲学者・京都帝国大学教授 (『九鬼周造全集』別巻、1982 年)

KUMASHIRO Isao, 熊代 猪三雄 (27), 1895–?, 和歌山県
WS1922/23, 哲学(哲学/国民経済学), Anlage 15.(b/Frl. Seebach), 早稲田大学卒業後に留学, 不詳 (『三木清著作集』2、1949 年)

KUNO Motosi, 久野 元治 （？）(27), 1899–?, 東京
SS1926, 法学(法学), 現地住所記載なし, 軍事法廷弁護士, 裁判官、東京芝浦電気(東芝)代表取締役会長他 (R.Hartmann 2003: Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945.)

KUREDA Masuki, 久禮田 益喜 (32), 1893–1975, 高知県高岡
WS1925/26–SS1927, 法学, Goethestr.6.1(b/Frau Pfander), 東北帝国大学助教授, 刑法学者・ 裁判官、東北帝国大学教授他 (『創価法学』1975 年 10 月)

【M】

MASE Kintarō, 馬瀬 金太郎 (26), 1898–1984, 東京

WS1924/25–SS1925, 哲学, Handschuhsh.Ldstr.40., 外務省外交官補, 外交官・ベルリン総領事他, 本来の生年/出身は 1897 年/富山市 (『昭和人名辞典』4、1943 年/『朝日新聞』1984 年 6 月 5 日朝刊)

MASUDA Jiryō, 増田 慈良 (35), 1887–1930, 茨城県結城町

SS1922–SS1925, 哲学, Anlage 5.(b/Frau Petters) , カルカッタ大学講師を辞して帰国後に留学, 仏教学者・大正大学教授, 1925 年ハイデルベルク大学で博士号取得 (『大正大学学報』1930 年 8 月)

MATSUBARA Hiroshi, 松原 寛 (32), 1892–1957, 東京 = MATSUBARA Kanpei, 松原 寛平

WS1924/25–WS1925/26, 哲学, Blumenstr.17., 日本大学教授、日本大学派遣留学生, 哲学者・日本大学教授、毎日新聞記者 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

MATSUMOTO Kaoru, 松本 馨 (26), 1901–1990, 福岡県若松

WS1927/28–SS1930, 哲学, Schloss Wolfsbrunnenweg 12., オックスフォード大学を経て留学, 政治学者・京城帝国大学教授他, 1930 年ハイデルベルク大学で博士号取得 (『東海大学紀要』1990 年)

MATSUMOTO Tokumyō, 松本 徳明 (31), 1898–1981, 広島 = MATSUMOTO Tokumei

SS1929–WS1929/30, 哲学(文献学/哲学), Kronprinzenstr.21., 不詳, 仏教学者・ボン大学教授他 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

MIKI Kiyoshi, 三木 清 (24), 1897–1945, 京都

WS1922/23–SS1923, 哲学, Bergstr.29.(b/Prof. Lemme.), 龍谷大学講師, 哲学者・法政大学教授他, 本来の出身は兵庫県龍野 (『三木清全集』19、1968 年)

MIYAMOTO Wakichi, 宮本 和吉 (40), 1883–1972, 山形県

WS1923/24–SS1924, 哲学, Kleinschmidtstr.44.(b/Frl. Kreitmaier), 新潟高等学校教授, 哲学者・京城帝国大学教授他 (『日本人名大辞典』2001 年)

MORI Gorō, 森 五郎 (22), 1901–1983, 東京 = HANI Gorō, 羽仁 五郎

WS1922/23–WS1923/24, 哲学, Rohrb.Str.80.(b/Frau v. Winning), 東京帝国大学学生, 歴史学者・日本大学教授、参議院議員, 本来の出身は群馬県桐生 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

MURAI Yūgo, 村井 勇吾 (28), 1904–1988, 東京

WW1932/33, 哲学(独文学/哲学), Hauptstr.222.(b/Herrn Denbert), 東京帝国大学卒業後、第 49 歩兵連隊従軍後に留学, 独文学者・関西学院大学教授 (『独逸文学研究』1970 年)

MUTAI Risaku, 務台 理作 (36), 1890–1974, 長野県温村

SS1926, 哲学, Philosophenweg 6.(b/G.Herrigel), 大谷大学教授、台湾総督府派遣留学生, 哲学者・台北帝国大学教授他 (『務台理作著作集』9、2002 年)

【N】

NAKANO Tomio, 中野 登美雄 (31), 1891–1948, 北海道札幌

WS1922/23, 法学(国家学), Anlage 15.(b/Frl. Seebach), 早稲田大学派遣留学生, 憲法学者・早稲田大学教授 (清水望「中野登美雄」『早稲田大学史紀要』1983 年)

NAKASHIMA Shin'ichi, 中島 愼一 (29), 1894–1943, 東京

SS1923, 哲学, Neuenh.Landstr.40.(b/Frau Wankel.), 東京帝国大学卒業後、コロンビア大学、シカゴ大学を経て留学, 哲学者・九州帝国大学教授 (『哲学年報』1944 年 3 月)

NARUSE Kiyoshi, 成瀬 清 (39), 1884–1958, 東京 = NARUSE Mukyoku, 成瀬 無極

SS1923–WS1923/24, 哲学, Wredeplatz 4.(b/Frau Dr. Vogtherr.), 京都帝国大学助教授, 独文学者・京都帝国大学教授他 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

NISHIMURA Isamu, 西村勃 (28), 1904–?, 大阪府岸和田

WS1932/33, 法学(法律学), Neuenh.Ldstr.66., 東京帝国大学大学院生、同志社大学嘱託講師, 不詳 (『同志社社報』1930 年 5 月・8 月)

NISHIURA Seiichi, 西浦 清一 (42), 1881–?, 大阪

WS1922/23–SS1923, 医学, Rosenbergweg 8.(b/Riet), 緒方病院補助医, 不詳, SS1922 はハイデルベルク大学薬学科研究協力者 (SA)

NOZAKI Sadataka, 野崎 貞孝 (21), 1902–1965, 東京

WS1923/24, 哲学(文学), Handsch'h.Ldstr.60.(b/Frau Kirsch), 学習院高等科を中途退学して留学, 不詳, 帰国後は築地小劇場等にて演劇活動に関与 (遠山清子『ことばといのち』1999 年)

【 O 】

OBI Hanji, 小尾 範治 (37), 1885–1964, 東京

WS1922/23–WS1923/24, 哲学, Kleinschmidtstr.44.(b/Frl. Kreitmaier), 小樽高等商業学校教授, 教育/哲学者・小樽高等商業学校教授、文部省官僚 (小川利夫編『現代社会教育の理論』1977 年)

ŌE Seizō, 大江 精三 (23), 1905–1992, 兵庫県御影

WS1928/29–SS1931, 哲学, Untere Neckarstr.28., 不詳, 哲学者・日本大学教授, 大江精一実弟 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

ŌHAZAMA Shūei, 大峡 秀栄 (38), 1883–?, 山形県米沢 = ŌHAZAMA Chikudō, 大峡 竹堂

WS1921/22–WS1922/23, 哲学(純正哲学), Kronprinzenstr.20.(b/Frau Bornhansen), 明治専門学校教授, 哲学者・成蹊高等学校教授他 (山田奨治『禅という名の日本丸』2005 年/H.Glockner 1969: Heidelberger Bilderbuch,S.229-231. & 233-237.)

ŌHE Seiitzi, 大江 精一 (25), 1898–1992, 兵庫県御影(= 現表記では ŌE Seiichi) = ŌE Seishirō, 大江 精志郎

WS1923/24–SS1926, 哲学, Uferstr.48a., 不詳, 哲学者・関西学院大学教授, 大江精三実兄 (『早稲田大学百年史』別巻Ⅰ、1990 年/大江精一『哲学的価値論の研究』1967 年)

OKAMOTO Shinjirō, 岡本 信二郎 (41), 1885–1942, 千葉県銚子

WS1926/27–SS1927, 哲学(法哲学), Kronpr.Str.17.(b/Frau Derichsweiler), 山形高等学校教授, 独語/哲学者・山形高等学校教授 (『蜂鳥』1942 年 12 月)

ŌUCHI Hiōye, 大内 兵衛 (33), 1888–1980, 兵庫 (= 現表記では ŌUCHI Hyōe)

WS1921/22–SS1922, 官房学(国家学), Mönchhofplatz 1.(b/Frau Dr.Kraemer), 大原社会問題研究所研究員(1921)/東京帝国大学助教授(1922), 経済学者・東京帝国大学教授他, 1921 年は森戸事件により東京帝大を離職中/1922 年より官費留学に切替え (『大内兵衛著作集』12、1975 年)

【 S 】

SAITŌ Masataka (20), 1908–?, 福井県羽生村

WS1928/29–SS1929, 医学(細菌学/病理解剖学), Untere Neckarstr.44., 不詳, 不詳 (SA)

SAKADO Chikai, 坂戸 智海 (31), 1894–1963, 東京

WS1925/26–WS1927/28, 哲学, Neue Schlossstr.26., 不詳, 仏教学者・大正大学教授 (塩入亮忠「坂戸智海教授を悼む」『大正大学学報』1964 年 3 月)

SASAKI Jūzō, 佐々木 重蔵 (37), 1885–1951, 宮城県登米町

WS1922/23, 法学, Werderstr.44.(b/Frl. Erbslöh), 不詳, 憲法/軍制学者・海軍経理学校校長、海軍主計中将 (R.Hartmann 2003: Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945.)

SERA Kazuo, 世良 寿男 (38), 1888–1973, 広島県口北村

WS1926/27, 哲学(倫理学/哲学), Kussmaulstr.3.(b/Frau Schopfer), 大谷大学教授, 倫理学者・台北帝国大学教授他 (馬本勉「明治期の英語授業過程に関する一考察」『英学史論叢』2005 年)

SUZUKI Munetada, 鈴木 宗忠 (42), 1881–1963, 愛知県二川 = SUZUKI Sōeki, 鈴木 宗奕

SS1923, 神学, Uferstr.48a.(b/Frau Riedel), 不詳, 宗教学者・東北帝国大学教授他 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

SHIMADA Takeo, 島田 武夫 (32), 1889–1982, 広島

SS1921, 法学, Blumenthalstr.6.(b/Frau Dr.Challenor), 弁護士、日本大学教授、日本大学派遣留学生, 刑法学者・日本大学教授他 (『日本大学百年史』2、2000 年)

SHIMADA Yoshiji, 島田 福司 (？) (41), 1882–?, 東京

SS1923, 法学, Werderstr.29., 不詳, 不詳 (R.Hartmann 2003: Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945.)

SHIMIZU Takeshi, 清水 武 (26), 1904–?, 神奈川県横浜

WS1930/31–SS1932, 哲学(宗教哲学), Anlage 44., 1928 年に青山学院卒業後、パシフィック・スクール・オブ・レリジョンを経て留学, 不詳 (SA)

SHIOMI Saburō, 汐見 三郎 (28), 1895–1962, 大阪

SS1923–SS1925, 法学(国家学), Schillerstr.5.(b/Dr. Ludwig Ohler), 京都帝国大学助教授, 財政学者・京都帝国大学教授他 (『経済学論叢』1961 年 3 月)

SHIRAI Seiichi, 白井 晟一 (25), 1905–1983, 京都

WS1930/31–SS1931, 哲学, Unt.Neckarstr.26., 京都高等工芸学校卒業後に留学, 建築家, 「ベルリン反帝グループ」メンバー (加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人』2008 年)

【T】

TAKAHASHI Satomi, 高橋 里美 (39), 1886–1964, 山形県上郷村

WS1925/26–SS1926, 哲学, Kronpr.Str.17.(b/Frau Derichsweiler), 東北帝国大学助教授, 哲学者・東北帝国大学教授他 (『高橋里美全集』7、1973 年)

TAKESHIMA Tomisaburō, 竹島 冨三郎 (31), 1893–1979, 大阪

WS1924/25–WS1925/26, 哲学/官房学/政治学, Untere Neckarstr.36., 大阪商科大学助教授, 財政学者・大阪商科大学教授 (『恒藤記念室叢書』7、2018 年)

TANAKA Jirō, 田中 次郎 (26), 1906–1968, 長野県須坂

WS1932/33–SS1935, 哲学(美術史/文学史), Unt.Neckarstr.34.(b/Happold), 慶應義塾大学卒業後に留学, 独文学者・慶應義塾大学教授 (訳者略歴『ドイツ社会民主党』1960 年/『読売新聞』1968 年 4 月 29 日朝刊)

TANAKA Masaru (25), 1899–?, 東京

WS1924/25–SS1925, 哲学(独文学)/官房学, Rosenbergweg 7.(b/Herrn Huber), 不詳, 不詳 (SA)

TANITA Giichi, 谷田 義一 (34), 1895–1931, 広島

WS1929/30, 官房学(国民経済学/哲学・古語), Helmholtzstr.4.(b/Gebhard), 長崎高等商業学校教授, 経済学者・長崎高等商業学校教授, SA 記載の登録学部は哲学/SS1930 は聴講生として登録 (『神戸高等商業学校一覧』1928 年/辻直人『近代日本海外留学の目的変容』2010)

TAOKA Kazuhiko, 田岡 嘉寿彦 (30), 1894–1985, 香川 = TAOKA Ganraikō, 田岡 雁来紅

WS1924/25–WS1925/26, 法学及び官房学, Alb.Maysstr.7.(b/Frau Horch), 大分高等商業学校教授, 商法学者・裁判官、彦根高等商業学校教授他 (『大阪経大論集』1986 年 7 月)

TATSUZAWA Tsuyoshi, 立澤 剛 (36), 1888–1946, 福岡

SS1924–WS1924/25, 哲学(独文献学), Schloss Wolfsbr.Weg 12.(b/Frau Schwartz), 第一高等学校教授, 独文学者・第一高等学校教授 (立澤剛随筆集刊行会『立澤剛随筆集』1957)

TERAKAWA Suejirō, 寺川 末治郎 (28), 1895–1966, 奈良

WS1923/24, 哲学, Albert Maysstr.9.(b/Wolfermann), 朝鮮総督府派遣留学生、東京高等商業学校専攻部卒業後に留学, 経済学者・神戸商科大学教授他 (『龍谷大学経済学論集』1966 年 2 月)

TOKIWA Toshita, 常盤 敏太 (33), 1899–1978, 九州

WS1932/33, 法学(刑法学/法哲学), Hauptstr.236.(b/Frau Dr. Drach), 裁判官、東京商科大学教授, 民法/刑法/法哲学者・東京商科大学教授他, 出身県は大分県 (団体法研究所編『人間・空間・時間』1976 年)

TOMITA Kumao, 富田 熊雄 (47), 1880–?, 福岡

SS1927–WS1928/29, 政治学/官房学(政治経済学/地理学・歴史学), Anlage 51., 中央大学教授, 独語学者・中央大学教授 (『中央大学学員名簿』1927 年/『中央大学誌』1935 年/沖田哲雄「昭和戦前期の教員と担当科目」『中央大学史紀要』1996 年)

TOMOMATSU Entai, 友松 圓諦 (33), 1895–1973, 愛知県名古屋

SS1928–WS1929/30, 哲学(仏教学/社会学), Goethestr.10.(b/Frau Pfeiffer), 慶應義塾大学教員、慶應義塾大学派遣留学生, 仏教学者・大正大学教授他 (友松圓諦『圓諦日記』真理舎、1989 年)

TSUKIMURA Masao (31), 1901–?, 東京蒲田

WS1932/33, 法学(商法), Schloss-Wolfsbrunnenweg 12-14., 鉄道学校教授, 不詳 (SA)

TSUNETŌ Kyō, 恒藤 恭 (36), 1888–1967, 島根県松江

WS1924/25–SS1925, 官房学(政治経済学), Handsch'h.Ldstr.25.(b/Frau Scherenberg), 京都帝国大学助教授, 法哲学者・京都帝国大学教授他, IMB 記載登録学部は哲学 (『恒藤記念室叢書』5、2015 年)

【 U 】

UCHIDA Fujio, 内田 藤雄 (22), 1909–1992, 熊本

WS1931/32–SS1932, 法学(国際法/政治諸学), Neuenh.Ldstr.46.(b/Hilger), 外務省派遣留学生, 外務省官吏 (『現代物故者事典 1991-1993』1994 年)

UEDA Kōtarō, 上田 好太郎 (？) (31), 1894–?, 大阪

SS1925, 官房学(国民経済学), Marktplatz 4.(b/Schartiger), 不詳(明治大学卒業), 社会主義運動家・日本社会主義同盟発起人か？ (R.Hartmann 2003: Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945.)

UNO Kiyonosuke, 宇野 喜代之介 (35), 1894–?, 茨城県水戸

SS1929–WS1929/30, 哲学(独語学/哲学), Kronprinzenstr.17.(b/Frau Derichsweiler), 山形高等学校教授, 小説家・府立高等学校校長、文部省官僚他 (『20 世紀人名辞典』2004 年)

【 W 】

WAKAYAMA Junshirō, 若山 淳四郎 (22), 1902–?, 愛知県三河

SS1924-WS1929/30, 官房学(国家学)/政治学/哲学, Bergstr.53.(b/Knauber), 慶應義塾大学学生, 日本語教師・チューリヒ大学教授、毎日新聞チューリヒ特派員他 (俵元昭「スイスに日本を講義する」『三田評論』1968 年 11 月)

WATANABE Shōkō, 渡辺 照宏 (23), 1907–1977, 東京

SS1930, 哲学(東洋文献学/哲学), Unt.Neckarstr.28.Ⅱ.(b/Kühner), 東京帝国大学卒業後に留学, 仏教学者・東洋大学教授他 (宮坂宥勝「渡辺照宏先生の略歴と業績」『渡辺照宏著作集』8、1982 年)

【 Y 】

YAMAMOTO Mikio, 山本 幹夫 (28), 1902–2001, 広島 = YAMAMOTO Kūgai, 山本 空外

SS1930, 哲学(哲学/文献学), Goethestr.6.Ⅰ., 広島文理科大学助教授, 倫理学者・広島文理科大学教授他 (龍飛水編『空外の生涯と思想』2003 年)

YAMANAKA Kenji, 山中 謙二 (35), 1893–1974, 長野県上諏訪

WS1928/29, 哲学(歴史学), Goethestr.6.(b/Pfander), 東京帝国大学講師, 歴史学者・東京帝国大学教授, SS1928 は聴講生として登録 (『日本人名大辞典』2001 年)

YAMASHITA Hiroaki, 山下 博章 (24), 1898–1980, 岡山

WS1922/23, 法学(法哲学), Kaiserstr.12.(b/Frl. Betz), 日本大学派遣留学生, 民法学者・日本大学教授 (『日本大学百年史』2、2000 年)

YAMASHITA Shōichi (28), 1895–?, 香川県琴平町
SS1923–WS1923/24, 法学および官房学, Werderstr.39.(b/Hamann.), 不詳, 不詳 (SA)

YAMAZAKI Shin'ichi, 山崎 新一 (28), 1895–?, 三重
SS1923, 法学, Kronprinzenstr.17., 弁護士、日本大学助教授、日本大学派遣留学生, 商法学者・日本大学教授 (『日本大学百年史』2、2000 年)

YASUI Seiichirō, 安井 誠一郎 (29), 1894–1962, 東京
SS1923, 法学, Kuno Fischerstr.7.(b/Bujard), 茨城県庶務課長兼社会課長, 内務省官僚、東京都知事、衆議院議員他 (安井誠一郎『第一次大戦後のドイツ』1986 年)

YOSHIDA Takewo (26), 1899–?, 東京 (= 現表記では YOSHIDA Takeo)
SS1925, 哲学, Zähringerstr.33.(b/Frau Dr. Planer), 不詳(獨協学園卒業), 不詳 (SA)

YOSHIOKA Satarō, 吉岡 佐太郎 (25), 1898–?, 福井
WS1923/24–WS1924/25, 哲学, Rohrb.Str.53., 不詳, 哲学者・明治大学講師 (『専修大学百年史』下、1981 年)

YUASA Seinosuke, 湯浅 誠之助 (23), 1905–?, 兵庫県神戸
SS1928–WS1928/29, 哲学(哲学/古語・独語学), Unt.Neckarstr.15.(b/H. Bennewitz), 第一高等学校を中途退学後、アイゼナハ・ギムナジウムを経て入学, 哲学者 (内山稔「求道の士パスカル」『理想』1981 年 7 月)

* 当該名簿の各登録者に関する情報は原則 2021 年 5 月現在での調査結果に依拠している。したがって今後も適宜更新される余地がある。また当該情報は基本的に UAH 所蔵の VdS、IMB ないし SA に基づくが、後年の職業・身分等に関しては参考資料等によって補った（登録氏名および初回登録現地住所については原則として VdS および SA に掲載された表記をそのまま記載している）。なお、氏名に下線のある者は文部省在外研究員である。

文献目録

略号一覧

UAH	Universitätsarchiv Heidelberg
VdS	*Verzeichnis der Studierenden*
IMB	*Immatrikulationsbuch*
SA	*Studenten Akten*
WS	Wintersemester
SS	Sommersemester

一次文献

ABE, Yoshishige 安部能成 (1944) [1934]: „Shinryoku no Haideruberuhi 新緑のハイデルベルヒ“. In: ABE, Yoshishige 安部能成: *Saiyū shō* 西遊抄. Tōkyō: Oyama shoten: 198–207.

ABE, Yoshishige 安部能成 (1966) [1965]: *Waga oitachi: Jijoden* 我が生い立ち: 自叙伝. Tōkyō: Iwanami shoten.

ABE, Jirō 阿部次郎 (1933): *Yūō zakki Doitsu no maki* 游欧雑記 独逸の巻. Tōkyō: Kaizōsha.

AKAMATSU, Kaname 赤松要 (1975) [1967]: „Gakumon henro 学問遍路". In: KOJIMA, Kiyoshi 小島清 (Hg.): *Gakumon henro: Akamatsu Kaname sensei tsuitō ronshū* 学問遍路: 赤松要先生追悼論集. Tōkyō: Sekai keizai kenkyū kyōkai: 9–27.

AMANO, Teiyū 天野貞祐 (1971a) [1931]: „Haideruberuku no omoide ハイデルベルクの思い出". In: AMANO, Teiyū 天野貞祐: *Amano Teiyū zenshū: Dōri no kankaku* 天野貞祐全集: 道理の感覚. Bd.1. Tōkyō: Kurita shuppankai: 11–17.

AMANO, Teiyū 天野貞祐 (1971b) [1938]: „Haideruberuku-gakuha no hitobito ハイデルベルク学派の人びと". In: AMANO, Teiyū 天野貞祐: *Amano Teiyū zenshū: Gakusei ni atauru sho* 天野貞祐全集: 学生に与うる書. Bd.2. Tōkyō: Kurita shuppankai: 97–102.

BADISCHE RUPRECHT-KARLS-UNIVERSITÄT ZU HEIDELBERG (1918–1933): *Verzeichnis der Vorlesungen sowie der Dozenten, Behörden und Institute der Badischen Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg*. Heidelberg: Buchdruckerei Paulbraus.

FUJITA, Keizō 藤田敬三 (1974): „Aru jisshō kenkyūsha no urabanashi ある実証研究者のうら話". In: *Keizai shiryō kenkyū* 経済資料研究. Nr. 8: 29–34.

GLOCKNER, Hermann (1969): *Heidelberger Bilderbuch: Erinnerungen von Hermann Glockner*. Bonn: Bouvier Verlag.

HANI, Gorō 羽仁五郎 (1948): „Waga ani waga shi Miki Kiyoshi わが兄・わが師 三木清". In: SANICHI SHOBŌ HENSHŪBU 三一書房編集部 (Hg.): *Kaisō no Miki Kiyoshi* 回想の三木清. Kyōto: Sanichi shobō: 123–153.

HANI, Gorō 羽仁五郎 (1950): „Tsuda Sōkichi hakase つだ さうきち博士". In: *Tosho* 図書. Nr. 7: 2–5.

HANI, Gorō 羽仁五郎 (1966): *Watakushi no daigaku: Gakumon no susume* 私の大学: 学問のすすめ. Tōkyō: Kōdansha.

ISHIHARA, Ken 石原謙 (1922): „Haideruberuku no machi nite ハイデルベルクの町にて". In: *Tōkyō joshi daigaku gakuyūkai zasshi* 東京女子大学学友会雑誌. Nr. 1: 4–7.

ISHIHARA, Ken 石原謙 (1961): „Sanpuku no ie ハイデルベルクの「山腹の家」". In: *Abe Jirō zenshū Geppō* 阿部次郎全集 月報. Nr. 9. Tōkyō: Kadokawa shoten: 68–70.

ISHIHARA, Ken 石原謙 (1979a) [1924]: „Kaisō (1 Doitsu ryūgaku no tabi kara) 回想（1 ドイツ留学の旅から）". In: YAMATANI, Seigo *et al.* 山谷省吾他 (Hg.): *Ishihara Ken chosakushū* 石原謙著作集. Bd.11. Tōkyō: Iwanami shoten: 117–149.

ISHIHARA, Ken 石原謙 (1979b) [1959]: „Gakkyū seikatsu gojūnen 学究生活五十年". In: YAMATANI, Seigo *et al.* 山谷省吾他 (Hg.): *Ishihara Ken chosakushū* 石原謙著作集. Bd.11. Tōkyō: Iwanami shoten: 3–115.

ISHII, Sadao 石井定雄 (1992): „Suikō to aruto Haideruberuku 水高と「アルト・ハイデルベルク」". In: ASAHI SHINBUN NAGOYA HONSHA HENSHŪ SEISAKU SENTĀ 朝日新聞名古屋本社編集制作センター (Hg.): *Ore no Gakkō : Dai sanjukkai tōkai gakushikai ryōkasai kinenshi* おれの学校: 第三〇回東海学士会寮歌祭記念誌. Nagoya: Tōkai gakushikai: 96–97.

IWASAKI, Akira 岩崎昶 (1980): *Eiga ga wakakatta toki* 映画が若かったとき. Tōkyō: Heibonsha.

JACOB, Eduard, Heinrich (1928): *Jacqueline und die Japaner: Ein kleiner Roman*. Berlin: E. Rowohlt.

JACOB, Eduard Heinrich (1952): *Jakurīnu to nihonjin* ジャクリーヌと日本人. Übers. von SAGARA, Morimine 相良守峯訳. Tōkyō: Iwanami shoten.

JASPERS, Karl (1965) [1958]: *Yasupāsu senshū: Tetsugakuteki jiden* ヤスパース選集: 哲学的自伝. Übers. von SHIGETA, Hideyo 重田英世訳. Bd.14. Tōkyō: Risōsha.

KINOSHITA, Mokutarō 木下杢太郎 (1982) [1927]: „Wareware no toottekita jidai 我々の通つて来た時代“. In: NODA, Utarō *et al.* 野田宇太郎他 (Hg.): *Kinoshita Mokutarō zenshū* 木下杢太郎全集. Bd.13. Tōkyō: Iwanami shoten: 136–142.

KITA, Reikichi 北昤吉 (1925): *Tetsugaku angya* 哲学行脚. Tōkyō: Shinchōsha.

KIYOMIYA, Shirō 清宮四郎 (1979): „Kenpōgaku shūhen gojūnen (Zadankai Kiyomiya Shirō sensei o kakonde) 憲法学周辺五〇年（座談会 清宮四郎先生を囲んで）“. In: *Hōgaku seminā* 法学セミナー. Nr. 23–8: 90–99.

KOBAYASHI, Yūgo 小林雄吾 (Hg.) (1926): *Rikkenseiyūkaishi* 立憲政友会史. Bd.4. Tōkyō: Rikkenseiyūkaishi hensanbu.

KOMAKI, Takeo 小牧健夫 (1936): „Haideruberuku ハイデルベルク“. In: *Sangoju* 珊瑚樹. Tōkyō: Hakusuisha: 90–92.

KUBO, Masaru 久保勉 (1959/60): „Omoidasu hitobito(10–11) 思ひ出す人々 (10–11)“. In: *Kokoro* 心. Nr. 12–11/13–2: 101–106/64–68.

KURUMA, Samezō 久留間鮫造 (1975): „Haideruberuku de no omoide ハイデルベルクでの憶い出“. In: *Ōuchi Hyōe chosakushū Geppō* 大内兵衛著作集 月報. Tōkyō: Iwanami shoten. Nr. 6: 1–4.

KYŪSEI KŌTŌ GAKKŌ SHIRYŌ HOZONKAI 旧制高等学校資料保存会 (Hg.) (1982): *Shiryō shūsei Kyūsei kōtō gakkō zensho* 資料集成 旧制高等学校全書. Bd.5. Tōkyō: Shōwa shuppan.

MANN, Golo (1993) [1986]: *Doitsu no Seishun* ドイツの青春. Übers. von HAYASHIBE, Keiichi *et al.* 林部圭一他訳. Bd.2. Tōkyō: Misuzu Shobō.

MEYER=FÖRSTER, Wilhelm (1903): *Alt=Heidelberg*. Berlin: Augst Scherl.

MEYER=FÖRSTER, Wilhelm(1935): *Aruto Haideruberuku* アルト・ハイデルベルク. Übers. von BANSHŌYA Eiichi 番匠谷英一訳. Tōkyō: Iwanami shoten.

MIKI, Kiyoshi 三木清 (1966a) [1923]: „Rickerts Bedeutung für die japanische Philosophie“. In: ŌUCHI, Hyōe *et al.* 大内兵衛他 (Hg.): *Miki Kiyoshi zenshū* 三木清全集. Bd.2. Tōkyō: Iwanami shoten: 42–49.

MIKI, Kiyoshi 三木清 (1966b) [1942]: „Dokusho henreki 読書遍歴“. In: ŌUCHI, Hyōe *et al.* 大内兵衛他 (Hg.):*Miki Kiyoshi zenshū* 三木清全集. Bd.1. Tōkyō: Iwanami shoten: 369–432.

MINISTERIUM DES KULTUR UND UNTERRICHTS (1920): *Akademische Vorschriften für die Badischen Universitäten zu Heidelberg und Freiburg*. Karlsruhe: C. F. Müllersche Hofbuchhandlung.

MONBUSHŌ SENMON GAKUMU KYOKU 文部省専門学務局 (Hg.) (1924): *Monbushō zaigaikenkyūin hyō* 文部省在外研究員表. Tōkyō: Monbushō senmon gakumu kyoku.

MORITO Tatsuo 森戸辰男 (1972): *Shisō no henreki: Kuropotokin jiken zengo* 思想の遍歴: クロポトキン事件前後. Bd.1. Tōkyō: Shunjūsha: 195–201.

MUTAI, Risaku 務台理作 (2000) [1964]: „Ryūgaku jidai no Takahashi Satomi san 留学時代の高橋里美さん“. In: FURUTA, Hikaru *et al.* 古田光他 (Hg.): *Mutai Risaku chosakushū* 務台理作著作集. Bd.1. Tōkyō: Kobushi shobō: 286–294.

NAIKAKU TŌKEI KYOKU 内閣統計局 (Hg.) (1924): *Nihon teikoku tōkei nenkan* 日本帝国統計年鑑. Tōkyō: Naikaku tōkei kyoku.

NAMIKŌ KASHŪ HENSHŪ IINKAI 浪高歌集編集委員会 (Hg.) (2000): *Namikō kashū* 浪高歌集. Ōsaka: Kyūsei Naniwa kōtō gakkō dōsōkai: 39.

NARUSE, Mukyoku 成瀬無極 (1924): *Yume tsukuru hito* 夢作る人. Kyōto: Naigai shuppan.

NARUSE, Mukyoku 成瀬無極 (1940): „Haideruberuku no omoide ハイデルベルクの思ひ出“. In: NARUSE, Mukyoku 成瀬無極: *Kinomi o hirou* 木の実を拾ふ. Tōkyō: Hakusuisha: 36–40.

NARUSE, Mukyoku 成瀬無極 (1952): „Yākopu to Jakurīnu to no omoide ヤーコプとジャクリーヌとの思い出“. In: JACOB, Eduard Heinrich: *Jakurīnu to nihonjin* ジャクリーヌと日本人. Übers. von SAGARA, Morimine 相良守峯訳. Tōkyō: Iwanami shoten: 143–168.

OBI, Hanji 小尾範治 (1923): „Haideruberuhi yori ハイデルベルヒより“. In: *Shisō* 思想. Nr. 17: 89–98.

ŌE, Seizō 大江精三 (1982): „Doitsu ryūgaku no enishi ドイツ留学のえにし“. In: *Watanabe Shōkō chosakushū Geppō* 渡辺照宏著作集 月報. Nr. 7. Tōkyō: Chikuma shobō: 1–3.

ŌUCHI, Hyōe 大内兵衛 (1948) [1925]: „Kare no koto: Itoi kun o omou 彼のこと: 糸井君を憶う“. In: *Kyūshi Kyūyū* 旧師旧友. Tōkyō: Iwanami shoten: 132–140.

ŌUCHI, Hyōe 大内兵衛 (1951): *Watakushi no rirekisho* 私の履歴書. Tōkyō: Ōdosha shoten.

ŌUCHI, Hyōe 大内兵衛 (1960): *Keizaigaku gojūnen (Zen)* 経済学五十年（全）. Tōkyō: Tōkyō daigaku shuppankai.

ŌUCHI, Hyōe 大内兵衛 (1966): „Haideruberuku ni okeru deai ハイデルベルクにおける出会い“. In: *Miki Kiyoshi zenshū Geppō* 三木清全集 月報. Nr. 1. Tōkyō: Iwanami shoten: 1–3.

ŌUCHI, Hyōe 大内兵衛 (1975) [1947]: „Infurēshon no jidai no Doitsu インフレーションの時代のドイツ“. In: ARISAWA, Hiromi *et al.* 有澤広巳他 (Hg.): *Ōuchi Hyōe chosakushū* 大内兵衛著作集. Bd.12. Tōkyō: Iwanami shoten: 195–201.

STATISCHES REICHSAMT (Hg.) (1925): „Zahlen zur Geldentwertung in Deutschland 1914 bis 1923“. In: *Sonderhefte zu Wirtschaft und Statistik*, H.1. Berlin: Hobbing.

STOLPER, Gustav *et al.* (Hg.) (1966): *Deutsche Wirtschaft seit 1870.* Tübingen: Mohr Siebeck Verlag.

SUITA, Junsuke 吹田順助 (1921): „Haideruberuku yori ハイデルベルクより“. In: *Shisō* 思想. Nr. 14: 80–86.

TAKIKAWA, Yukitoki 瀧川幸辰 (1937): „Haideruberuku no omoide ハイデルベルクの思出“. In: *Zuisō to kaisō* 随想と回想. Kyōto: Ritsumeikan shuppanbu: 161–169.

TAOKA, Ganraikō 田岡雁来紅 (1960): „Rikkeruto sensei リッケルト先生“. In: *Uma no ashiato* 馬の足跡. Tōkyō: Kōran tankakai: 12–13.

TOMOMATSU, Entai 友松円諦 (1989): „Entai nikki: Ryūgaku nikki 円諦日記: 留学日記“. In: YAMAMOTO, Sachiyo 山本幸世 (Hg.): *Tomomatsu Entai Nikki shō: Michi o kikite kokoro yasuraka nari* 友松円諦日記抄: 道をききてこころやすらかなり. Tōkyō: Shinrisha: 37–57.

TOKIWA, Toshita 常盤敏太 (1933): „Saikin no Doitsu tsūshin: Haideruberugu yori 最近の独逸通信: ハイデルベルグより“. In: EIMOTO, Shigeru 栄本茂 (Hg.): *Ikkyō shinbun* 一橋新聞. Tōkyō: Tōkyō shōka daigaku ikkyōkai. Nr. 175: 4.

TSUCHIDA, Kyōson 土田杏村 (1935) [1926]: „Nihon Shina gendai shisō kenkyū 日本支那現代思想研究“. In: TSUNETŌ, Kyō *et al.* 恒藤恭他 (Hg.): *Tsuchida Kyōson zenshū* 土田杏村全集. Bd.4. Tōkyō: Daiichi shobō: 13–269.

TSUNETŌ, Kyō 恒藤恭 (1946): „Banshū no Haideruberuku kara 晩秋のハイデルベルクから“. In: *Jiyū bunka* 自由文化. Nr. 6: 47 –50.

TSUNETŌ, Kyō 恒藤恭 (1952): „Gakuto seikatsu no omoide 学徒生活の思い出“. In: *Dōmei jihō* 同盟時報. Nr. 114/115: 84–86/75–77.

TSUNETŌ, Kyō 恒藤恭 (1955) [1953]: „Gakkyū seikatsu no kaiko 学究生活の回顧“. In: TSUNETŌ, Kyō *et al.* 恒藤恭他: *Gendai zuisō zenshū* 現代随想全集. Bd.27. Tōkyō: Tōkyō sōgen sha: 215–241.

TSUNETŌ, Kyō 恒藤恭 (2013): „Ōshū ryūgaku nikki (1924) 欧州留学日記（1924）“. In: ŌSAKA SHIRITSU DAIGAKU TSUNETŌ KINENSHITSU 大阪市立大学恒藤記念室 (Hg.): *Tsunetō kinenshitsu sōsho* 恒藤記念室叢書. Bd.3. Ōsaka: Ōsaka shiritsu daigaku daigakushi shiryōshitsu: 5–120.

RADBRUCH, Gustav (1962) [1951]: *Rātoburufu chosakushū: Kokoro no tabiji* ラートブルフ著作集: 心の旅路. Übers. von YAMADA, Akira 山田晟訳. Bd.10. Tōkyō: Tōkyō daigaku shuppankai.

RICKERT, Heinrich (1924): *Das Eine, die Einheit und die Eins: Bemerkungen zur Logik des Zahlbegriffs*. Tübingen: Mohr Siebeck Verlag.

YAMAMOTO, Eiichi 山本英一 (1973): „Shōwa no hajime koro no sensei 昭和のはじめ頃の先生“. In: *Takahashi Satomi zenshū Geppō* 高橋里美全集 月報. Bd.5. Tōkyō: Fukumura shuppan: 3–6.

YASUI, Seiichirō 安井誠一郎 (1986): *Daiichiji taisen go no Doitsu: Yasui Seiichirō Doitsu ryūgaku nikki yori* 第一次大戦後のドイツ: 安井誠一郎ドイツ留学日記より. Tōkyō: OHIRA Katsue.

二次文献

ARAKAWA, Ikuo *et al.* 荒川幾男他 (1981): „Zadankai 1920nendai o kangaeru 座談会・1920 年代を考える“. In: *Shisō* 思想. Nr. 689: 2–31.

ARAKI, Yasuhiko 荒木康彦, SCHAMONI, Wolfgang (1999): *Komatsu Seiji 1848–1893: Der erste japanische Student an der Universität Heidelberg.* Heidelberg: Japanologisches Seminar der Universität Heidelberg.

ARAKI, Yasuhiko 荒木康彦 (2003): *Kindai Nichi-Doku kōshōshi kenkyū josestu: Saisho no Doitsu daigaku nihonjin gakusei Majima Seiji to Kāru Rēman* 近代日独交渉史研究序説: 最初のドイツ大学日本人学生馬島済治とカール・レーマン. Tōkyō: Yūshōdō.

ARIMA, Manabu 有馬学 (1999): *Nihon no Kindai: Kokusaika no naka no teikoku Nihon* 日本の近代: 「国際化」の中の帝国日本. Bd.4. Tōkyō: Chūōkōron shinsha.

BEPPU, Akirō 別府昭郎 (1973): „Kindai Doitsu ni okeru gakubu kōzashi kenkyū (2): Tyūbingen daigaku kokkakeizaigakubu no setchi 近代ドイツにおける学部・講座編成史研究 (2): Tübingen 大学国家経済学部の設置“. In: *Kyōikugaku kenkyū kiyō* 教育学研究紀要. Nr. 18: 19–21.

BEPPU, Akirō 別府昭郎 (1974): „Jūkyūseiki Doitsu daigaku tetsugakubu ni okeru kenkyū kyōiku taisei no hen'yō 十九世紀ドイツ大学哲学部における研究教育体制の変容“. In: *Rekishi hyōron* 歴史評論. Nr. 301: 76–89 & 24.

BEPPU, Akirō 別府昭郎 (1975): „Tetsugakubu no rekishiteki hen'yō: Tyūbingen daigaku no rigakubu no setchi o megutte 哲学部の歴史的変容: テュービンゲン大学の理学部の設置をめぐって“. In: *Kyōikugaku kenkyū* 教育学研究. Nr. 42–1: 12–20.

BEPPU, Akirō 別府昭郎 (1977): „Myunhen daigaku ni okeru kokkakeizaigakubu no keisei katei ミュンヘン大学における国家経済学部の形成過程“. In: *Meiji daigaku jinbunkagaku kenkyūjo kiyō* 明治大学人文科学研究所紀要. Nr. 15: 1–14.

BEPPU, Akirō 別府昭郎 (2016): *Daigaku kaikaku no keifu: Kindai daigaku kara gendai daigaku e* 大学改革の系譜: 近代大学から現代大学へ. Tōkyō: Tōshindō.

BITTEROLF, Markus *et al.* (Hg.) (2014): *Intellektuelle in Heidelberg 1910–1933: Ein Lesebuch zu 32 Porträts.* Heidelberg: Buchhandlung Stefan Schöbel.

BLECHER, JENS (2011): „Tokyo-Leipzig-Tokyo. Die Weltuniversität Leipzig zwischen 1870 und 1909". Online verfügbar unter〔下記 URL にて閲覧可〕: http://www.archiv.uni-leipzig.de/ual/150-jahre-deutsch-japanische-beziehungen/ (zuletzt aufgerufen〔最終閲覧〕: 13.09.2018).

BLOMERT, Reinhard (1994): „Sozialewissenschaften in Heidelberg". In: BAHNS, Jörn (Hg.): *Zwischen Tradition und Moderne Heidelberg in den 20er Jahren.* Heidelberg: Kurpfälzisches Museum der Stadt Heidelberg: 167–177.

BUSELMEIER, Karin *et al.* (Hg.) (1985): *Auch eine Geschichte der Universität Heidelberg.* Mannheim: Edition Quadrat.

DANTAIHŌ KENKYŪJO 団体法研究所 (Hg.) (1976): *Ningen Kūkan Jikan: Tokiwa Toshita hakase kiju kinen ronshū* 人間・空間・時間: 常盤敏太博士喜寿記念論集. Tōkyō: Wakō shuppan.

DOERR, Wilhelm (Hg.) (1985): *Semper Apertus: Sechshundert Jahre Universität Heidelberg 1386-1986.* Bd.Ⅲ. Berlin, Heidelberg, New York, Tōkyō: Springer Verlag.

DRÜLL-ZMMERMANN, Dagmar (1986): *Heidelberger Gelehrtenlexikon 1803–1932*. Berlin, Heidelberg, New York, Tōkyō: Springer Verlag.

FINK, Oliver (2002): *‚Memories vom Glück': Wie der Erinnerungsort Alt-Heidelberg erfunden, gepflegt und bekämpft wurde.* Heidelberg, Ubstadt-Weiher, Basel: Verlag Regionalkultur.

FIX, Karl-Heinz (1994): *Universitätstheologie und Politik: Die Heidelberger Theologische Fakultät in der Weimarer Republik.* Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter.

FRIESE, Eberhard (1980): *Japaninstitut Berlin und Deutsch-japanische Gesellschaft Berlin: Quellenlage und Ausgewählte Aspekte ihrer Politik 1926–1945.* Berlin: Ostasiatisches Seminar, FU-Berlin.

FRIESE, Eberhard (1990): „Kontinuität und Wandel: Deutsche-Japanische Kultur und Wissenschaftsbeziehungen nach dem Ersten Weltkrieg". In: VIERHAUS, Rudolf, VOM BROCKE, Bernhard (Hg.): *Forschung im Spannungsfeld von Politik und Gesellschaft: Geschichte und Struktur der Kaiser-Wilhelm-Max-Planck-Gesellschaft.* Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt: 802–834.

GETREUER-KARGL, Ingrid, LINHART, Sepp (Hg.) (2013): *Die Republik Österreich und Japan während der Zwischenkriegszeit 1918–1938 (1945).* Wien: Abteilung für Japanologie des Instituts für Ostasienwissenschaften der Universität Wien.

GÜLBERG, Niels (1997): „Eugen Herrigels Wirken als philosophischer Lehrer in Japan (1)". In: *Waseda-Blätter.* Nr. 4: 41–66.

GÜLBERG, Niels (1998): „Eugen Herrigels Wirken als philosophischer Lehrer in Japan (2)". In: *Waseda-Blätter.* Nr. 5: 44–59.

HAASCH, Günther (Hg.) (1996): *Die Deutsch-japanischen Gesellschaften von 1888 bis 1996.* Berlin: Berlin Ed. Colloquium.

HARA, Hideo 原秀男 (1979): „Shin-Kanto-gakuha 新カント学派". In: NODA, Yoshiyuki et al. 野田良之他 (Hg.): *Kindai Nihon hō shisōshi* 近代日本法思想史. Tōkyō: Yūhikaku: 271–313.

HARTMANN, Rudolf (2000): *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870–1914.* Berlin: Mori-Ōgai-Gedenkstätte.

HARTMANN, Rudolf (2003): *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920–1945.* Berlin: Mori-Ōgai-Gedenkstätte.

HARTMANN, Rudolf (2005): *Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen 1868–1914.* Berlin: Mori-Ōgai-Gedenkstätte.

HARTMANN, RUDOLF (2005): *Lexikon Japans Studierende. Japans Studierende in Deutschland 1868–1914*. Online verfügbar unter: https://themen.crossasia.org/japans-studierende/ (zuletzt aufgerufen: 21.05.2021).

HEPP, Frieder (1994): „Zwischen lebendigem Geist und deutschem Ungeist: Der ‚Heidelberger Geist' in den zwanziger Jahren". In: BAHNS, Jörn (Hg.): *Zwischen Tradition und Moderne Heidelberg in den 20er Jahren.* Heidelberg: Kurpfälzisches Museum der Stadt Heidelberg: 245–264.

HIROKAWA, Tadahide 広川禎秀 (2004): *Tsunetō Kyō no shisōshiteki kenkyū: Sengo minshushugi ・heiwashugi o junbi shita shisō* 恒藤恭の思想史的研究: 戦後民主主義・平和主義を準備した思想. Tōkyō: Ōtsuki shoten.

HIROKAWA, Tadahide 広川禎秀 (2006): „Yoneda Shōtarō no shakai shisō oyobi Shin-Kanto-ha shisō no kenkyū 米田庄太郎の社会思想及び新カント派思想の研究". In: ŌSAKA SHIRITSU DAIGAKU BUNGAKU KENKYŪKA KENKYŪ SŌSHO HENSHŪ IINKAI 大阪市立大学文学研究科叢書編集委員会 (Hg.): *Ōsaka shiritsu daigaku bungakukenkyūka kenkyū sōsho* 大阪市立大学文学研究科叢書. Bd.4. Ōsaka: Seibundō shuppan: 61–79.

HUGHES, Henry Stuart (1970): *Ishiki to shakai: Yōroppa shakai shisō 1890–1930* 意識と社会: ヨーロッパ社会思想 1890–1930. *Übers. von* IKIMATSU, Keizō, ARAKAWA Ikuo 生松敬三, 荒川幾男訳. Tōkyō: Misuzu shobō.

IIDA, Taizō 飯田泰三 (1997): *Hihan seishin no kōseki: Kindai Nihon seishinshi no ichiryōsen* 批判精神の航跡: 近代日本精神史の一稜線. Tōkyō: Chikuma shobō.

IIDA, Taizō 飯田泰三 (2017): *Taishō chishikijin no shisō fūkei: Jiga to shakai no yukue* 大正知識人の思想風景: 「自我」と「社会」のゆくえ. Tōkyō: Hōsei daigaku shuppankyoku.

IKIMATSU, Keizō 生松敬三 (1980): *Haideruberuku: Aru daigaku toshi no seishinshi* ハイデルベルク: ある大学都市の精神史. Tōkyō: TBS Buritanika.

INDEN, Masashi 位田将司 (2014): *Kankaku to Sonzai: Yokomitsu Riichi o meguru konkyo e no toi* 「感覚」と「存在」: 横光利一をめぐる「根拠」への問い. Tōkyō: Meiji shoin.

INDEN, Masashi 位田将司 (2015): „Bungaku no kachi: Yokomitsu Riichi to geijutsuteki kachi ronsō 「文学」の「価値」: 横光利一と「芸術的価値論争」". In: *Gobun* 語文. Nr. 152: 31–44.

ISHIDA, Takeshi 石田雄 (1984): *Nihon no shakai kagaku* 日本の社会科学. Tōkyō: Tōkyō daigaku shuppankai.

ISHIDA, Takeshi (2008): *Die Entdeckung der Gesellschaft: Zur Entwicklung der Sozialwissenschaften in Japan.* Übers. von SEIFERT, Wolfgang. Frankfurt a. M: Suhrkamp.

ISHIKAWA, Kenji 石川健治 (2016): „Kaisetsu 解説" In: SASAKI, Sōichi 佐々木惣一: *Rikken hirikken* 立憲非立憲. Tōkyō: Kōdansha: 223–253.

ITŌ, Takao *et al.* 伊藤貴雄他 (2021): „Kindai Nihon ni okeru kachi-tetsugakusha no gunzō (1) 近代日本における価値哲学者の群像 (1)". In: *Tōyō gakujutsu kenkyū* 東洋学術研究. Nr. 60-1: 78–149.

JAKSCH, Hans Jürgen (1994): „Inflation und Ruhrbesetzung 1923: Die deutsche Wirtschaft in den ersten Jahren der Republik". In: BAHNS, Jörn (Hg.): *Zwischen Tradition und Moderne*

Heidelberg in den 20er Jahren. Heidelberg: Kurpfälzisches Museum der Stadt Heidelberg: 25–33.

KADOWAKI, Takuji 門脇卓爾 (1989): „Nihon ni okeru Shin-Kanto-ha no juyō 日本における新カント派の受容“. In: *Risō* 理想. Nr. 643: 63–66.

KAEGI, Dominic (1994): „Zur Tradition der Moderne: Die Heidelberger Philosophie in den zwanziger Jahren“. In: BAHNS, Jörn (Hg.): *Zwischen Tradition und Moderne Heidelberg in den 20er Jahren.* Heidelberg: Kurpfälzisches Museum der Stadt Heidelberg: 179–196.

KATŌ, Masayuki 加藤将之 (1972): *Haideruberuku no shinwa* ハイデルベルクの神話. Tōkyō: Tanka shinbunsha.

KATŌ, Shinpei 加藤新平 (1969): „Atogaki あとがき“. In: TSUNETŌ, Kyō 恒藤恭: *Hō no kihon mondai* 法の基本問題. Tōkyō: Iwanami shoten: 479–493.

KATŌ, Tetsurō 加藤哲郎 (2008): *Waimāru ki Berurin no nihonjin: Yōkō chishikijin no hantei nettowāku* ワイマール期ベルリンの日本人: 洋行知識人の反帝ネットワーク. Tōkyō: Iwanami shoten.

KAWAI, Daisuke 川合大輔 (2016): „Senkyūhyaku nijū nendai Nihon ni okeru shakai kagakuron no bunmyaku: Kagaku shakaigaku no shiten kara yomitoku 1920 年代日本における社会科学論の文脈: 科学社会学の視点から読み解く“. In: *Nenpō Kagaku Gijutsu Shakai* 年報 科学・技術・社会. Nr. 25: 49–75.

KAWAI, Daisuke 川合大輔 (2017): „Senkyūhyaku nijū nendai Nihon ni okeru jinbun kagakuron no dōkō: Kagaku no bunrui to keitō ni tsuite no genron o chūshin to shite 1920 年代日本における人文科学論の動向: 科学の分類と系統についての言論を中心として“. In: *Kagakushi kenkyū* 科学史研究. Nr. 283: 176–195.

KISHIKAWA, Fujio 岸川富士夫 (1983a): „Shin-Kanto-ha(Seinan-Doitsu-gakuha) to kindai shakai: Wēbā Rasuku Sōda 新カント派（西南ドイツ学派）と近代社会: ウェーバー・ラスク・左右田“. In: *Keizaikagaku* 経済科学. Nr. 30–3: 123–158.

KISHIKAWA, Fujio 岸川富士夫 (1983b): „H, Rikkāto no risōshugiteki kachi tetsugaku to shakaishugiron: Kindaiteki shutai no dōshutsu o megutte H・リッカートの理想主義的価値哲学と社会主義論：近代的主体の導出をめぐって“. In: MIYAMOTO, Kenichi *et al.* 宮本憲一他 (Hg.) (1983): *Shiminshakai no shisō* 市民社会の思想. Tōkyō: Ochanomizu shobō: 447–469.

KOHNLE, Armin, ENGEHAUSEN, Frank (Hg.) (2001): *Zwischen Wissenschaft und Politik: Studien zur deutschen Universitätsgeschichte: Festschrift für Eike Wolgast zum 65. Geburtstag.* Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

KONNO, Hajime 今野元 (2018): *Yoshino Sakuzō to Uesugi Shinkichi: Nichi-Doku sensō kara Taishō demokurashī e* 吉野作造と上杉慎吉: 日独戦争から大正デモクラシーへ. Nagoya: Nagoya daigaku shuppankai.

KREINER, Josef, MATHIAS, Regine (Hg.) (1990): *Deutschland-Japan in der Zwischenkriegszeit.* Bonn: Bouvier Verlag.

KUNO, Jōtarō 久野譲太郎 (2013): „Haideruberuku ryūgaku o tsuujite miru Tsunetō Kyō to Shin-Kanto-ha: Senkyūhyakunijūyonen todokuji shiryō o tegakari to shite ハイデルベルク留学を通じてみる恒藤恭と「新カント派」: 1924 年渡独時資料を手がかりとして“. In: *Ōsaka shiritsu daigakushi kiyō* 大阪市立大学史紀要. Nr. 6: 20–46.

KUNO, Jōtarō 久野譲太郎 (2018): „Haideruberuku ni okeru Tsunetō Kyō no shūgaku to seikatsu: Zai genchi・shin shiryō no shōkai o kanete ハイデルベルクにおける恒藤恭の修

学と生活: 在現地・新資料の紹介をかねて“. In: *Ōsaka shiritsu daigakushi kiyō* 大阪市立大学史紀要. Nr. 11: 41–59.

LAUFS, Adolf, ACKERMANN, Markus Rafael (1994): „Die Juristische Fakultät in den zwanziger Jahren“. In: BAHNS, Jörn (Hg.): *Zwischen Tradition und Moderne Heidelberg in den 20er Jahren.* Heidelberg: Kurpfälzisches Museum der Stadt Heidelberg: 197–203.

LUDWIG-MAXIMILIANS-UNIVERSITÄT MÜNCHEN (1919–1933): Personen- und Studentenverzeichnisse. Universitätsbibliothek. Online verfügbar unter: https://epub.ub.uni-muenchen.de/view/lmu/pverz.html (zuletzt aufgerufen :08.05.2021).

MATSUO, Takayoshi 松尾尊兊 (1987): „Taishō demokurashī 大正デモクラシー“. In: KOKUSHI DAIJITEN HENSHŪ IINKAI 国史大辞典編集委員会 (Hg.): *Kokushi daijiten* 国史大辞典. Bd.8. Tōkyō: Yoshikawakōbunkan: 775–778.

MATSUZAWA, Hiroaki 松沢弘陽 (1994): „Jiyūshugiron 自由主義論“. In: ASAO, Naohiro *et al.* 朝尾直弘他 (Hg.): *Iwanami kōza Nihon tsuushi* 岩波講座 日本通史. Bd.18. Tōkyō: Iwanami shoten: 239–288

MIYAJIMA, Mitsushi 宮島光志 (2019): „Bunka to kachi: Binderubanto no isan 文化と価値: ヴィンデルバントの遺産“. In: *Risō* 理想. Nr. 703: 22–36.

MIYAJIMA, Mitsushi 宮島光志 (2020): „Kindai Nihon tetsugaku to chi no seidoka: Kuwaki Gen‘yoku no jiseki o tadoru 近代日本哲学と〈知の制度化〉: 桑木厳翼の事績を辿る“. In: *Risō* 理想. Nr. 704: 68–84.

MIYAKAWA, Tōru 宮川透 (1956): *Kindai Nihon no shisō kōzō* 近代日本の思想構造. Tōkyō: Tōkyō daigaku shuppankai.

NIHON DAIGAKU HYAKUNENSHI HENSAN IINKAI 日本大学百年史編纂委員会 (Hg.) (2000): *Nihon daigaku hyakunenshi* 日本大学百年史. Bd.2. Tōkyō: Nihon daigaku.

NISHIMURA, Minori 西村実則 (2013): „Haideruberuku no Baresā to Tomomatsu Entai ハイデルベルクのヴァレザーと友松円諦“. In: *Taishō daigaku sōgō bukkyō kenkyūjo nenpō* 大正大学綜合佛教研究所年報. Nr. 35: 113–120.

ŌHASHI, Yōichirō 大橋容一郎 (2008): „Taishō ki ni okeru Kanto kenkyū no dōkō: Kuwaki Gen‘yoku to Shin-Kanto-gakuha 大正期におけるカント研究の動向: 桑木厳翼と新カント学派“. In: *Nihon no tetsugaku* 日本の哲学. Nr. 9: 19–36.

ŌHASHI, Yōichirō 大橋容一郎 (2015): „Kindai Nihon no ninshikironshi to Kanto tetsugaku 近代日本の認識論史とカント哲学“. In: *Nihon no tetsugaku* 日本の哲学. Nr. 16: 63–80.

ŌHASHI, Yōichirō 大橋容一郎 (2016a): „Shinrigakuteki ninshikiron to tetsugakuteki ninshikiron: Biruherumu Bunto o tegakari ni 心理学的認識論と哲学的認識論: ヴィルヘルム・ヴントを手がかりに“. In: *Shisō* 思想. Nr. 1106: 104–125.

ŌHASHI, Yōichirō 大橋容一郎 (2016b): „Junsei tetsugaku to shite no keijijōgaku: Rottse, Busse to meiji tetsugaku 「純正哲学」としての形而上学: ロッツェ、ブッセと明治哲学“. In: *Shisō* 思想. Nr. 111: 155–172.

ŌHASHI, Yōichirō 大橋容一郎 (2017): „Shin-Kanto-gakuha to kindai Nihon: Kuwaki Gen’yoku to Miki Kiyoshi o tegakari to shite 新カント学派と近代日本: 桑木厳翼と三木清を手がかりとして“. In: *Shisō* 思想. Nr. 1118: 130–147.

ŌHASHI, Yōichirō 大橋容一郎 (2018a): „Kuwaki Gen’yoku ni okeru Shin-Kanto-shugi to Shin-Kanto-gakuha: Rīru to Binderubanto ni yoru shinrishugi no chōkoku 桑木厳翼における「新」カント主義と「新カント学派」: リールとヴィンデルバントによる心理主義の超克“. In: *Shisō* 思想. Nr. 1126: 105–126.

Ōhashi, Yōichirō 大橋容一郎 (2018b): „Bunkashugi no Kisū: Shin-Kanto-gakuha no tetsugaku to bunkashugi 文化主義の帰趨: 新カント学派の哲学と「文化主義」“. In: *Shisō* 思想. Nr. 1135: 220–238.

Ōki, Yasumichi 大木康充 (2017): „Kindai Nihon ni okeru bunkashugi no tōjō to sono tenkai: Kuwaki Gen'yoku, Kaneko Chikusui, Tsuchida Kyōson 近代日本における「文化主義」の登場とその展開: 桑木厳翼・金子筑水・土田杏村“. In: Hagiwara, Minoru, Itō, Shin'ya 萩原稔, 伊藤信哉 (Hg.): *Kindai Nihon no taigai ninshiki* 近代日本の対外認識. Bd.2. Tōkyō: Sairyūsha: 109–152.

Ōki, Yasumichi 大木康充 (2019): „Sōda Kiichirō ni okeru ‚Bunkashugi no ronri' to Shin-Kanto-ha-shakaishugi 左右田喜一郎における「文化主義の論理」と新カント派社会主義“. In: *Daitō hōsei ronshū* 大東法政論集. Nr. 28: 63–77.

Rōyama, Masamichi 蠟山政道 (1949): *Nihon ni okeru kindai seijigaku no hattatsu* 日本における近代政治学の発達. Tōkyō: Jitsugyōnotomosha.

Sasakura, Hideo 笹倉秀夫 (2018): „Tsunetō Kyō santen no kōsatsu: Kōsakuteki heizon no shikō zentaishakairon seiteihōshugi 恒藤恭 3 点の考察:「交錯的並存」の思考・全体社会論・制定法主義“. In: *Ōsaka shiritsu daigakushi kiyō* 大阪市立大学史紀要. Nr. 11: 1–18.

Schamoni, Wolfgang (2011): „Japanische Studenten 1868 bis 1914“. In: Meusburger, Peter, Thomas Schuch (Hg.): *Wissenschaftsatlas der Universität Heidelberg.* Knittlingen: Bibliotheca Palatina: 307–308.

Schneider, Jutta (1994): „Heidelberger Alltag in den zwanziger Jahren“. In: Bahns, Jörn (Hg.): *Zwischen Tradition und Moderne Heidelberg in den 20er Jahren.* Heidelberg: Kurpfälzisches Museum der Stadt Heidelberg: 49–85.

Schwentker, Wolfgang (1991): „Die Japan-Studien Emil Lederers“. In: *Rikkyō keizaigaku kenkyū* 立教経済学研究. Nr. 44–3: 107–127.

Schwentker, Wolfgang (2013): *Makkusu Wēbā no Nihon: Juyōshi no kenkyū 1905–1995* マックス・ウェーバーの日本: 受容史の研究 1905–1995. *Übers. von* Noguchi Masahiro *et al.* 野口雅弘他訳. Tōkyō: Misuzu shobō.

Seifert, Wolfgang (2011): „Heidelbergs Wirkung auf japanische Studenten in den 1920er Jahren“. In: Meusburger, Peter, Thomas Schuch (Hg.): *Wissenschaftsatlas der Universität Heidelberg.* Knittlingen: Bibliotheca Palatina: 308–309.

Seifert, Wolfgang (Hg.) (2013): *Japanische Studenten in Heidelberg: Ein Aspekt der deutsch-japanischen Wissenschaftsbeziehungen in den 1920er Jahren.* Heidelberg, Ubstadt-Weiher, Neustadt a.d. W, Basel: Verlag Regionalkultur.

Shibasaki, Atsushi 芝崎厚士 (2009): *Kindai Nihon no kokusai kankei ninshiki: Tomonaga Sanjūro to ‚Kanto no heiwaron'* 近代日本の国際関係認識: 朝永三十郎と『カントの平和論』. Tōkyō: Sōbunsha.

Shimizu, Tarō 清水太郎 (1994): „Kanto-gakuha to taishō ki Nihon no tetsugaku: Nishida Kitarō to Sōda Kiichirō カント学派と大正期日本の哲学: 西田幾多郎と左右田喜一郎“. In: *Gendai shisō* 現代思想. Nr. 22–4: 210–229.

Suetake, Yoshiya 季武嘉也 (2012): „Taishō ki no kaigai tokō 大正期の海外渡航“. In: *Kindai Nihon kenkyū* 近代日本研究. Nr. 29: 105–123.

Sugiura, Tadao 杉浦忠夫 (1996): „Gunberu jiken kō: Kyōran no Haideruberuku daigakushi 1924-1932 (Sono 1) グンベル事件考: 狂乱のハイデルベルク大学史 1924–1932 (その 1) “. In: *Meiji daigaku Kyōyōronshū* 明治大学教養論集. Nr. 287: 67–97.

TAKEUCHI, Yō 竹内洋 (1999): *Nihon no kindai: Gakureki kizoku no eikō to zasetsu* 日本の近代: 学歴貴族の栄光と挫折. Bd.12. Tōkyō: Chūōkōron shinsha.

TAKEUCHI, Yō 竹内洋 (2003): *Kyōyōshugi no botsuraku: Kawariyuku erīto gakusei bunka* 教養主義の没落: 変わりゆくエリート学生文化. Tōkyō: Chūōkōron sha.

TAKEUCHI, Yō 竹内洋 (2018): *Kyōyō-ha chishikijin no unmei: Abe Jiro to sono jidai* 教養派知識人の運命: 阿部次郎とその時代. Tōkyō: Chikuma shobō.

TANIGUCHI, Maya 谷口摩耶 (2008): *Sofu kara no sazukarimono: Tomomatsu Entai to gekidō no jidai* 祖父からの授かりもの: 友松円諦と激動の時代. Tōkyō: Asahi shinbunsha.

TERAWAKI, Motonobu 寺脇丕信 (1986): „Yakusha atogaki ni kaete: Sannin no tetsugakusha 訳者あとがきに代えて: 三人の哲学者". SCHINZINGER, Robert: *Kāru Yasupāsu no omoide* カール・ヤスパースの想い出. Übers. von TERAWAKI, Motonobu 寺脇丕信訳. Tōkyō: Hokuju shuppan: 137–177.

TILITZKI, Christian (2014) [2001/02]: *Die deutsche Universitätsphilosophie in der Weimarer Republik und im Dritten Reich.* Berlin: Akademie Verlag.

TŌHOKU DAIGAKU 東北大学 (1960): *Tōhoku daigaku gojūnenshi* 東北大学五十年史. Sendai: Tōhoku daigaku.

TSUJI, Naoto 辻直人 (2019): „Ryūgaku no Nihon kindaika ni hatashita yakuwari 留学の日本近代化に果たした役割". In: *Kindai Nihon kenkyū* 近代日本研究. Nr. 36: 1–35.

TSUJI, Naoto 辻直人 (2010): *Kindai Nihon kaigai ryūgaku no Mokuteki hen'yō : Monbushō ryūgakusei no Haken jittai ni tsuite* 近代日本海外留学の目的変容:文部省留学生の派遣実態について. Tōkyō: Tōshindō.

TSUTSUI, Kiyotada 筒井清忠 (1995): *Nihongata kyōyō no unmei: Rekishi shakaigakuteki kōsatsu* 日本型「教養」の運命: 歴史社会学的考察. Tōkyō: Iwanami shoten.

UCHIDA, Hiroshi 内田弘 (1996): „Haideruberuku to Miki Kiyoshi ハイデルベルクと三木清". In: ISHIZUKA, Masahide *et al.* 石塚正英他 (Hg.): *Toshi to Shisōka* 都市と思想家. Bd.2. Tōkyō: Hōsei daigaku shuppankyoku: 53–73.

ULMER, Peter (Hg.) (1998): *Geistes-und Sozialwissenschaften in 20er Jahren: Heidelberger Impulse.* Heidelberg: C. F. Müller.

UNIVERSITÄTSARCHIV LEIPZIG (2011): *Japaner an der Universität Leipzig.* Online verfügbar unter: http://www.archiv.uni-leipzig.de/ual/150-jahre-deutsch-japanische-beziehungen/ (zuletzt aufgerufen: 13.09.2018).

USHIOGI, Morikazu 潮木守一 (1973): *Kindai daigaku no keisei to hen'yō: Jūkyūseiki Doitsu daigaku no shakaiteki kōzō* 近代大学の形成と変容: 一九世紀ドイツ大学の社会的構造. Tōkyō: Tōkyō daigaku shuppankai.

WADA, Hirofumi *et al.* 和田博文他 (Hg.) (2008): *Gengo toshi Berurin: 1861–1945* 言語都市・ベルリン: 1861–1945. Tōkyō: Fujiwara shoten.

WAKI, Keihei 脇圭平 (1973): *Chishikijin to seiji: Doitsu* 1914–1933 知識人と政治: ドイツ・1914–1933. Tōkyō: Iwanami shoten.

WATANABE, Minoru 渡辺實 (1978): *Kindai Nihon kaigai ryūgakuseishi* 近代日本海外留学生史. Tōkyō: Kōdansha.

WEISERT, Hermann *et al.* (Hg.) (2007): *Rektoren-Dekane Prorektoren-Kanzler-Vizekanzler der Universität Heidelberg 1386–2006.* Heidelberg: Kurpfälzischer Verlag.

WIEHL, Reiner (1985): „Die Heidelberger Tradition der Philosophie zwischen Kantianismus und Hegelianismus: Kuno Fischer, Wilhelm Windelband, Heinrich Rickert". In: DOERR,

Wilhelm (Hg.): *Semper Apertus: Sechshundert Jahre Universität Heidelberg 1386–1986.* Bd. Ⅱ. Berlin, Heidelberg, New York, Tōkyō: Springer Verlag: 413–435.

WOLGAST, Eike *et al.* (Hg.) (1993): *Emil Julius Gumbel 1891–1966: Akademische Gedächtnisfeier anlässlich des 100. Geburtstages*. Heidelberg: C. F. Müller.

YAGI, Kiichirō *et al.* 八木紀一郎他 (2018): „Kindai Nihon no chishiki shakai no naka de no keizaigaku: Tayōsei to bōkyaku 近代日本の知識社会の中での経済学: 多様性と忘却“. In: YAGI Kiichirō *et al.* 八木紀一郎他 (Hg.): *Umoreshi kindai Nihon no keizaigakusha tachi* 埋もれし近代日本の経済学者たち. Kyōto: Shōwadō: x–xix.

YAGI, Kiichirō 八木紀一郎 (2018): „Ryōtaisenkan ki Doitsu de no zaigai kenkyū: Keizaigakusha no kyōwakoku taiken 両大戦間期ドイツでの在外研究: 経済学者の共和国体験“. In: YAGI Kiichirō *et al.* 八木紀一郎他 (Hg.): *Umoreshi kindai Nihon no keizaigakusha tachi* 埋もれし近代日本の経済学者たち. Kyōto: Shōwadō: 208–241.

YAMADA, Shōji 山田奨治 (2005): *Zen to iu na no Nihon-maru* 禅という名の日本丸. Kyōto: Kōbundō.

YASUKATA, Toshimasa 安酸敏眞 (2016): *Ōbei ryūgaku no genfūkei: Fukuzawa Yukichi kara Tsurumi Shunsuke e* 欧米留学の原風景: 福沢諭吉から鶴見俊輔へ. Tōkyō: Chisen shokan.

YŌ, Teruko 葉照子 (1998): „Daiichiji taisen go no Nichi-Doku kankei shūfuku katei ni okeru bunka kōryūshiteki ichisokumen: Kanokogi Kazunobu o megutte 第一次大戦後の日独関係修復過程における文化交流史的一側面: 鹿子木員信をめぐって“. In: *Kyūshū Doitsu bungaku* 九州ドイツ文学. Nr. 12: 43–67.

YORIOKA, Ryūji 依岡隆児 (2013): „Kyūsei kōkō kara mita seishun gainen no keisei 旧制高校からみた「青春」概念の形成“. In: SUZUKI, Sadami *et al.* 鈴木貞美他 (Hg.): *Higashi-Ajia ni okeru chiteki kōryū: Kī konseputo no saikentō* 東アジアにおける知的交流: キイ・コンセプトの再検討. Kyōto: Kokusai Nihon bunka kenkyū sentā: 327–342.

謝辞 Dankesworte

当該調査の遂行に際しては、ドイツ滞在中、ハイデルベルク大学日本学科、クラスターオブエクセレンス（Asia and Europe in a Global Context）、大学公文書館、学長事務室各機関の研究者や職員のみなさま、さらには日本からの客員の研究者の方々より多大なご厚意とご助力とを頂戴致しました。また、テュービンゲン大学日本学科のエミリ・ビショフさんからは常日頃よりドイツ語全般についてのご親切なご教示をいただきました。お世話になりましたすべての方々に対し、ここに誌して感謝の微衷を申し添えたく思います。なお本研究は、ハイデルベルク大学国際アルムニ（HAI）より客員研究員用の研究再訪助成を受けるとともに、JSPS 科研費の交付を受けたものです（課題番号: 16K16915、課題番号: 19K13349）。

Bei der Ausführung dieser Forschung habe ich während meines Aufenthaltes in Deutschland von zahlreichen Wissenschaftler/innen und Mitarbeiter/innen des Instituts für Japanologie, des Clusters „Asia and Europe in a Global Context“, des Universitätsarchivs und des Rektorates der Universität Heidelberg sowie von Gastprofessoren/rinnen aus Japan freundlicherweise Unterstützung erhalten. Des Weiteren war mir Frau Emily Bischof, Studierende am Institut für Japanologie der Universität Tübingen, immer wieder eine Hilfe beim Erlernen der deutschen Sprache. Ich möchte mich herzlichst bei allen bedanken. Außerdem habe ich für diese Forschung von Heidelberg Alumni International der Universität Heidelberg das Stipendium für Gastwissenschaftler/innen und vom JSPS in Japan das staatliche Stipendium KAKENHI (科研費, Zuschuss Nummer 16K16915, sowie Zuschuss Nummer 19K13349) erhalten.